

郎路生麻◇幹主

川柳雜誌

號 月 八

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和二年八月一日發行 每月一日發行

川柳雜誌 第四卷第八號

川柳雜誌社發行



川柳 青明忌

◇日時 八月七日午後七時

◇場所 神戸市中町通五丁目有馬道停留場下車協和會館

◇兼題 「瀧」 三句 紋太選

◇會費 貳拾錢

臨海川柳會

◇日時 八月十一日午後七時

◇場所 南海沿線濱寺南海食堂階上

◇兼題 「海岸」 三句

◇會費 二十錢

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のために眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌 第四卷第八號目次

感想・評論

雜詠目指して

病床獨斷語(三)

川柳靴盜難の記

劍花坊氏の句

山峽の叔父へ

太陽を驅使せよ

研究・其他

柳釋二十四篇まで(六)

評釋「海」

宗春といふ人

生業の古川柳(三)

川柳の松江(一)

大塚山其他

平塚の一夜

川柳累卵の遊び(四)

漫畫

相談

漁師

少年

本社七月例会

歓迎川柳大會(松江)

相元 紋太

木村 半文

大島 濤明

安川 久流

庄 萬よし

三好 革郎

麻生 路郎

佐々木 桂雨

岩崎 柳路

蛭子 省二

麻生 路郎

竹馬 居主人

檜山 千代二

路 郎

柴舟 畫

句

篠原 春雨選

柳川 洲馬選

刀三、飯山共選

橋本 二柳子報

奈良 井仙坊報

各地柳壇・川柳書架・川柳家戸籍調
村の音頭取(表紙)

題字

編輯室から

創

白日句稿

川柳塔

作

吉田 清

小出 樽重

路 郎 生

麻生 路郎

庄 萬よし

松本 助六

岩崎 柳路

中澤 濁水

安西 杏三

三好 革郎

高橋 かほる

奈良 井仙坊

檜山 千代二

津田 耕水

麻生 霞乃女

橋本 二柳子

安川 久流美

相元 紋太

中野 柳陽

木村 半文

諸 家

近作 柳樽



近作柳樽

路郎

眉墨はよせ此の俺が笑はれる
 水盤の絹糸草が戀でし た
 辨當にだけせめてはと妻思ひ
 サアカスの娘よ勘忍しておくれ
 子の末がさうなるものか夫婦きり
 ありし日の舊友さしてお話を
 泣いて居ましたが思ひ切るでしよか
 逢ふてやつて下さい坊や歩きます
 起すまいとして憎らしい蚊を逃がし
 捨て育ちには孝行ものばかり
 行水のそこを閉めてさ女の子
 夏帽子今日の疲れをいふて掛け
 海の淋しさも自分のものさなる
 植込の中の中なる笑ひ聲
 越えられぬ溝を人妻知つてゐて
 ノーブルな鼻の向きあふソーダ水
 本町に住んで人間味をなげき
 卑下をすることにまなれて笑ふのみ

豊 同

中

石 同

選

竹



自働車の走る限りは青田なり
 運轉手雨後の緑の中をつき
 折目正しく内助の功さ知られたり
 天窓の光りがとゞくとこに縫ひ
 家政婦の姿なるもうれしくて
 こげさうに馬車山の端にさしかり
 抜毛が殖てきたなごゝ母のこさ
 父と歩めば釣橋が揺れてくる
 夫婦仲よく裏地を買ふて
 尼僧から哀れすゝきの背が高い
 鐘樓を清い心に降りてくる
 青空へブランコの足打付ける
 鍵一つこの大金をもてあそび
 正直な人が電車に饒れたり
 媾曳の傘一本に雨もよし
 その親へ娘みついでるるばかり
 阿呆らしくなつてくさみが出て了ひ
 聞ねば硝子越しから笑ふて居
 無作法な事が旦那のお氣に召し
 移轉後は尙美堂へも用があり
 東京へ續ぐレールと思はれず
 華かな囃子となつて殺される
 良い方も見たので遂に買はず去に
 泣くくの話にしてはあつけなし

同 同 同 同 大 同 同 同 同 同 同 大 同 同 同 同 同 同 同 同 神 同 同 同

阪

阪

戸

同 同 同 同 進 同

一郎

美

月



云ひそびれ上の空にて聞いてゐる
 瓢箪の埃は祖父が死んでから
 笑ひ聲待つて酒屋でございます
 犬捕りのあまりはつきり見せてくれ
 仕事着へ兄黙々と手を通し
 窓口に立つて今更低いこご
 方便の嘘それ程にうれしうか
 押賣にうかゝ荷物擴けられ
 親が来て女中は歸ることになり
 出世してそんなお方は知りませぬ
 新聞屋自轉車で来て水へ投げ
 靴磨き足の細さにはらくし
 スクラツプ支那のごたく斗り貼り
 よくかはる趣味アンテナをぶちぎり
 夏は夏此處もあしこも奥をみせ
 亂闘へ辯士暫らく休むなり
 顔馴染ウエートレスも椅子へかけ
 仲裁はまだく金が要るばかり
 噛み殺す欠伸を伯父は知らぬ也
 踏みにじる氣ではないがときおろし
 ぎことなく好きだと娘顔をそめ
 猫いらす買ふて彼の女を試めして見
 兄弟がよつてたかつて損をさせ
 同じ幅振つて振子は日が暮れる

同 同 同 同 神 同 同 同 同 松 同 同 同 同 同 魚 同 同 同 同 大 同 同

戸 江 崎 阪

同 同 同 同 志 同 同 同 同 穗 同 同 同 同 同 亂 同 同 同 同 舟 同 同

郎 波 耽 々



人のもつ残忍性の前で死に
 天才をぎこに忘れた二十二よ
 樂書のまゝ廢坑の納屋は朽ち
 揃つて鳴かなきや松虫氣がすま
 刑事よりちつと離れて連れてかれ
 打水へ深水ゑがく姿なり
 舞妓もう嘘々々とさり合はず
 瞬間を清くして行く涙なり
 公用と知らず仲居のよく笑ひ
 容録器錢の最後のやうな音
 轉居して庭の廣さへ菜をつくる
 絲ミりの子が夕焼に唱ひ出し
 肩くんで去ぬ子を追ふて黄昏れる
 猿芝居犬が一藝先へやり
 夏羽織仲居は如才なく脱がし
 大部屋に密柑の皮のだらしなさ
 時鳥追手の歸る方へ飛び
 もっ一度室を見廻す退院日
 永代經寺へ頼んで又嫁ぎ
 見こまれた丁稚夜學へ通はされ
 ボット出の丁稚に困るビルヂング
 煽風器うっかり世辞を聞き損ね
 見て居れば異人人目を憚らず
 アセチリン人出の中に陣をとり

同 同 神 同 同 同 御 同 同 同 大 同 同 同 池 同 同 同 大 同 同 同 福

四

戸 影 阪 田 阪 岡

同 同 二 同 同 同 柳 同 同 同 秋 同 同 同 白 同 同 同 其 同 同 同 無

南 秀 晴 蝶 象 限



意見する身にも昔が甦り
 レシーパー母は淨瑠璃だけを借り
 貴方のものですと女の氣の輕さ
 泣止んだ子供に睫毛光るなり
 目方まで雜誌通りの御手料理
 さてもく忍耐強き澤庵よ
 大洋に船は木の葉さなりにけり
 戀の猫戀の人間戀の鳥
 雨だれのやうなギターを聴くもよし
 一生を最敬禮で果てし父
 人みな若し太股の春の泥
 一寸手が觸つただけに仰山な
 丸髻のあいつに逢ふて淋しい日
 口答へするまで嫁のうちさけて
 ふくよかな肩を藝者は見せて行き
 古本屋損したこまはでかく云ひ
 親の義務果すと見へぬ妻がくる
 よう聞けば隣りもくらし向きの聲
 其次ぎは象の聲か子へ困り
 もう隣り寝るのか梯子段の音
 もう一人あつても好いさ淋しがり
 名僧になつて魚も食へるなり
 音をさせて呉れいさ嫁の事
 満されぬ心流れを凝視て居

大 同 同 松 同 同 同 同 大 同 同 神 同 同 松 同 同 大 同 同 石 同 同 六
 阪 江 阪 戸 江 阪 川
 與 同 同 粹 同 同 光 同 同 炭 同 同 笑 同 同 町 同 同 靜 同 同 金 同 同
 詩 浪 浪 路 車 人 二 雲 鐵 子
 夫 人 人 路 車 人 二 雲 鐵 子



お隣りご區切りをつけて水を打ち
 要るだけの雨戸をあけて一人きり
 頼まれてみれば親父の氣質が出
 親類のつゞきの端に博士ゐる
 儲かるご云ふは母への手紙だけ
 かんてきは煙りながらに舟は出る
 パンにしてくれご女房少こし病み
 無理もないけれごも養子なだめられ
 飴賣りのごこへいぬのか暮れかゝり
 仕事着に兄責任があるのなり
 もう二度ご縮まぬゴムにして了ひ
 犬と向き合つてる猫の尾の凄き
 藎然らばご云ふ面構は
 もの思ひ人形のやうな姿で居
 色町で聞くチャラメラは淋しすぎ
 落ぶれて國へ歸れば雀が居
 いもほうを出て圓山をだるう下り
 人生の春にそむいて貯めてゐる
 色街の生れ登山に趣味をもち
 突然のここに娘のあつけなし
 鏡臺を派手に見てゐる病上り
 いろはさへ知らぬ女に惑はされ
 鯛の鯛子供御飯を忘れて來
 神の事聞きたがる程やつれて來

大 同 大 同 松 同 同 同 同 同 同 大 同 山 同 同 大 同 同 同 廣 同 同 同 同 同
 阪 阪 江 梨 三日坊改 島
 杏 同 流 同 清 同 源 同 一 同 冷 同 天 同 同 同 同 同 同 羊 同 同 彩 同 同
 三 星 宵 坊 徹 笑 花 城 司 秋



聞くだけは聞いて置くがご巻煙草
 お手ばかり聞かれてうるさがりもせず
 自轉車へ逃げない母の度胸にて
 女教員電車で聖書讀んで行き
 さんなにもして貰へるに持ちくづし
 欺いて生きねばならぬ灯がごもり
 笑つてはるれご哀れな人ばかり
 物干で枯たもまじる植木鉢
 怒てるるとこへ届いた計の知らせ
 山水のかりがね墨がはねたやう
 校友へ山の自慢を書いて出し
 もう俺も眼鏡の力さらばにて
 大掃除見なれぬ寫真手を休め
 町嚙に案山子の目鼻つけてあり
 朝市に續いて餅屋荷を下し
 褒られて植木屋鉢を無てるる
 起された耳にカナリヤ鳴てるる
 ダリヤ等つくつてはでな日を送り
 時鳥の故事などひくも一人者
 言ひにくい相談母へまづ當り
 大切な相談へ子はいとけなく
 黄金へだけは診察してあける
 頼りないやうに見せたくない主人
 金盃轉がる音も大仰に

同 石川 同 鶴莊 同 石川 同 大坂 同 大坂 同 京都 同 安東縣 同 石川 同 大坂 同 石川 同 普天
 同 茶撫朗 同 雪洞 同 醉夢 同 北山人 同 花蝶 同 京郎 同 よし江 同 籬楓 同 無心 同 玉仙 同 眺太郎



親の氣も知りず袂をひるがへし
 云ひ出せず笑ふて歸る淋しい夜
 世に知られまた親類が二三ふへ
 この不平がいつまで己を生かすのか
 今日もまた歸らぬ馬鹿に嫁の事
 下足番せくなご云はぬばかりなり
 好いた人だけに眞貞輕くみる
 一人者着物の數を釘に見せ
 不似合な夫歸妾にして仕舞
 看板屋苦もなく書いて向き直り
 迷せるつもり鏡に向き直り
 植木鉢そのまゝ肥が乗せてあり
 何もなく寂しく留守居唄になり
 劍劇も上手濡場も又上手
 夏來れば冬來る事を忘るゝ身
 犁の力が笑はれてゐるすゝ拂
 ぬかるみへ市松模様にはらがり
 夏休み先生に子のあるを知り
 花を折る素足がふるふ岩の上
 派手なのを地味な女は振り返り
 迷ひ子へ見に来たやうな人だから
 お互様ですよに訛が輕うすみ
 話さでも濟むこご妓生歡待し

島輪大 同 神 戸 石 長 大 神 横 長 德 同 同 同 大 同 松 同 別 同 同
 根 島 阪 戸 畑 川 野 阪 戸 濱 崎 島 阪 江 府

天 佳 九 芳 默 北 盜 高 青 郊 夢 秀 常 同 啞 同 春 同 粹 同 童 同 同
 痴 雅 香 子 堂 星 鐘 峰 石 村 人 幸 吉 人 陽 浪 人 翁
 人 子 柳 子 堂 星 鐘 峰 石 村 人 幸 吉 人 陽 浪 人 翁



雑詠目指して

梶 元 紋 太

るかも知れぬが先づこの類ひのもの。

題詠可を稱へる理由の一つは、題の数を多く拵へることか、それを押し進めて行けば即ち雑詠なるではないか。と言ふのミ次ぎは、題詠によつた句さ因らぬ句さあつて、前者が後者よりも優れた藝術味のある句が往々ある事實を奈何するか。と言ふのミ、も一つの理由は、題は潜在せる感激をおびき出す焦點とするもので一つの方便であるから佳句さへ作れば責むべきことではない。と言ふのミ、もう一つは、眞に藝術化する力の人であれば題詠ミ雑詠の如何んは超越する。と言ふのミ、まだあ

私は無題賛成の雑詠主義であるが、もつミ本當を言へば、無題提唱の精神ミ云ふものがそれを信する者各自が無言裡に實行すべきものでこれを他に提唱し勧誘すべきものでは無いと思ふから、實際の場合に適合する様、雑詠中心主義ミか雑詠理想主義ミか名付くべきが現在の私の心持である。無題提唱の精神には何等反對すべきものが無いにも拘はらず、多くの反對ミ黙殺を受けるのはその説明に缺くる處があり、天下り式の押つけ主

義が禍するのであると思はれる。

無題主義者は現在の柳界の状態を見て堪へて居れないから無題を提唱する。多くの缺陷を藏してゐるのが現在の柳界である柳界が進んで已まぬものであるなら當然雜詠中心主義ならざるを得ぬと思ふ。若し現在の儘で進まないとしたならば藏された多くの缺陷は露出されて益々擴大し到底救ふことの出来ない淵に臨まねばならない。

兩者の論争は電車の上下線を行く様なものである。立場が異ふから横から見ると衝突を仕さうでも。空しく摺れ違つてゐる無題主義の説は句は従であつて作る人が主である。題詠可を説く人は、句が主であつて作る人は従である。即ち川柳は句であるから句さへ善いものであればそれでよい句が肝心である。目的は句にあるといふのである。無題の方は、句が幾許善くても作る人が悪ければ何にもならない。作家の人格、作る手段が肝心でそれが正しく無ければその作品も零であるといふのである。句に重心を置かか人に重心を置かかの論争でなくてはならない。

それを只だ無題か題詠かの方法のみを論じてゐるから妙にこ

ぢれて来るのだと思ふ。

句にのみ重心を置き過ぎる者が句の職工になるも當然だし。人にのみ重心を置く者が潔癖で偏狂な詩人がりに見わるのも無理ではないと思ふ。勿論何方を主とし何方を従にするべきでは無い。句も人も主でなくてはならぬ。句も人も均衡する處に立派な川柳が生れると云ひたい。だが我々は何方かを主としてやらなければ進むことが出来ないらしい。善き句が善き人を作るか、善き人が善き句を作るか何方かの道を撰ばなくては進み難い。それは我々が完全無缺でないからであると思ふ。我々が完全である時この問題は起らない。

だから柳壇全體が句にのみ重點を置き過ぎる氣付いた者は無題を提唱したくなるであらう。それは柳壇が完全な状態に置かれてないからである。柳壇自身も句にのみ重點を持つて行くことするのはその不完全を示してゐるものである。善き句であると共に善き柳壇でなくてはならない。善き柳壇でない場合、その作品は常に穢れ勝ちである。現在の柳壇がよき柳壇であらうか。その作品は善き作品であらうか。これを考へる時に無題提唱者は今の場合、善き作品の有無よりも、善き柳壇であらし

め、善き人であらしめ様を努力してゐる者であることが譯る。

題の数を多く作るに、それを押し進めて行けば即ち雑詠と同様ではないかといふのは多く句會のみの作句をやる人に多い。又は句會を主としてゐる人に多い。その人達はまた云ふ。雑詠と云ふこそ自身が一つの大きな題詠である。事々物々題ならざるは無い。殊更雑詠なご、稱する必要はない、と。

これを考へて見るに、題詠不可説は現今行はれてゐる句會制度に據つて生れる題詠作品をさすのであつて自分から進んで作句衝動の起つた時自己の周圍から自分の好む題を把へ來ることは敢し構はないと言はなくてはならぬ。現今の句會制度に生れる課題吟は全く自己の作句衝動から生れないで、他から與へられた自己の意思の加らない題に依つて作句を營まなくてはならない。それは恰度職工が注文を受けてから作業を始めるのと同じである。又時計が常には停つてゐるがぜんまいを懸けられると始めて活動を起すのによく似てゐる。與へられた題に依つて唯々諸々、自己の興味嗜好から種々の構材を粘り出してお目にかける。その結果は全く各作者の経験、機智、頓才、言葉の競べ合ひで甲は乙よりも多くを識つて居た。丙は丁より想像力が勝れてゐた云ふ事を示すの止まる。これが現今の課題吟の有様である。恙つした眼で見ると句會は一つの壓搾機械の様なもの

で案内狀に依つて多數の人を集め、題といふ動力を與へる人々は茲に活動を起して句といふ製品を龍の様に流出する。それは人々の油であり肉であるかも知れないが一種の商品として見なければならぬ。

然し茲にさう一概に言へない非常な微妙な作用がある。それは句會を自己に吸収することにである。最初は他動的に運動を始めるけれども、それと同時にその作用が始まる。句會も題詠も殆んど自動的に取扱ふのである。これは川柳が好きで堪らなくなつた最初の頃に最も自然に行はれる。句會も題も自己に吸収するといふか句會の方へ没入するといふか。殆んど自動的に活動するのである。もう其時は束縛も感じない。制限も恐れもない。自由に自己の感情を喚起することが出来る。怎麼時に藝術味豊かな作品が飛び出して來る。これは作句利那の態度が他動的な句會も課題も超越し得てゐるからである。懸賞金付にしても同じ事である。この作用あるがために課題吟からも懸賞吟からも時として佳句が生まれるのである。

けれ共、何故、利那のにも藝術的になり得、佳句を生むことを爲し得る人が何を好んで壓搾機的な句會。競技的な課題吟

のみに甘んじてゐるか。縦合雑吟の名の下に句を作るにしても句會も同じ方法を以て自分以外から題材を求めやうとするのかさうした機械的な競技的な方法から離れて、自由に自己感興の赴く儘に作句して徹頭徹尾、藝術的に終始しないのであらうか自己をも高く、作品をも高く純真無垢の境地に詩人としての誇りを保たないのか。これは畢竟、句を發表する機關の罪であり傳統的に盲從する作家の罪でもある。

雑詠主義の眞意義は、前に述べた如く、これを提唱し勸誘するのではなく、さう信する者が無裡に實行すべきものである。

雑詠主義は生ける世間に投げ出された詩人の姿で無ければならぬ。究極は自分一個の世界、他の侵し得ない高所に立つもので無くてはならぬ。句會も要らない。課題も要しない。柳界も要らぬ世界に住むものでなくてはならぬ。句會に於ける課題を排して無題にせよでは徹底してゐない云はねばならぬ。それだけなら單なる啓蒙運動と見られても仕方が無い。そして雑詠主義の實行者はより高い人格者でありより高い詩人であらねばならぬ。

元より我々は不完全であるから努力して完成に達しなくては

ならない。川柳の第一義は句そのものであるから作家の態度心情的な疑問處でない云ひ切る事は不完全な我々には最も危険なこと云はねばならない。句さへ善ければそれでよいと言ふ人でも、その作句方法が巫山戯た心情から出發してゐたり輕薄な態度であつたりしたらそれが明白であつたら必ず不快を感じるに違ひない。句そのものを重要視し乍らも作家の人格のそれに伴ふことを要求せずにはゐられないであらう。そこに作家が努力して完全に近づかなくてはならぬものがある。より高い人格でより高い詩を作らなくてはならない。

そこで私は怎う考へる。私の句を完成せしめるまでは壓搾も競技も嫌はない。私は不完全であるから總ゆる方法を以て私の句を磨き上げなくてはならない。それと同時に、自由な、束縛のない、自然を對象に、生きた世間を眞つ只中にあるべき雑詠の世界に私の理想を描いて、眞の私の生まれるべき處に一步步進むべく努力を断たない。私の到達すべき處は眞の雑詠の世界である。私かもし達し得た曉はもう句會もない、柳壇もない。いや句會も従いて來い。柳壇も隨へ、云ふ事になるのだと考へる。私は現在さう信じ切つてゐるので此の頃の一步步々を確實に雑詠の世界を目指して進めてゐるのである。(終り)

生業の古川柳 (三)

東京支部
川柳行脚中
岩崎柳路
蛭子省二

(二十五) 柿 賣

時珍曰梯高樹大葉圓にして光澤あり、四月花をひらき黃白色實を結ぶ青綠色八九月熟す

あの柿賣めと大地へ叩きつけ
盡くはこんご返へしなこ柿を賣り

(二十六) 密柑賣

そそな密柑賣は猫を擔き出し

(二十七) 豆腐賣

三都さも粉無異桶制小異あり、京阪豆腐一價十二文半挺六文、半挺以上を賣る焼豆腐油あけさうふ共に各二文江戸は豆腐一價五十余文より六十文に至り、豆價の貴賤に應ず半挺或は四半挺以上を賣る京阪價半價四分一價也焼豆腐揚豆腐各四文蓋京阪豆腐小形江戸大形にて價相當す又京都には半挺を賣ず一挺以上を賣る因記 天保十三年二月晦日江戸箱屋町豆腐

屋與八豆腐價廉に賣る故に官より賞の古來豆腐宮制堅一尺八寸廣九寸なるを以て製は是を十或は十一に斬分て一挺を號けるを例さす與八のみ是を九挺に斬つて價五十二文に賣る他よりは四文廉也云々當時價五十六文にて與八のみ形大にして五十二文に賣る故に賞の

豆腐屋は時計のやうに廻るなり
豆腐賣貧乏寺の時計なり
生ごつたやうに豆腐屋しほるなり
味噌こしで小半町程まねかれる

(二十八) 麩 賣

麩賣は呼ぶに短か過ぎたり

(二十九) 錢絡賣

錢差賣は京坂諸司代邸城代邸等の中間の内職江戸は火消役邸中間の内職に製めて市民に賣る大略十緡を一把とし十把を束さす一束價大約百文を與ふ京阪は一把以

上を賣る一把六文ばかりを與ふ蓋し三都さにも大小戸に應じ或は生業に據つて多少を強賣る開店の家等特に強賣る又二三十年前は毎時爭論に矯じて錢を貪る近年官より戒之故に三都さにも爭論稀にて貧らなご薄し

(三十) 木綿賣

余若年頃、高荷云て木綿一反づ、段々積重ね高さ一丈程にして脊負て賣歩き行きける買人あれば竹竿を以て掛處をして取出し見せけり、右高荷を上にして兩掛にして賣歩き行けり、是も近年はなく當時は木綿賣絶わたり木綿云つては手拭を賣行く者而已也

(三十一) 手拭賣

木綿賣乳母がみるうち抱いてゐる口豆で荷をなでられる木綿賣
大店をかぶつて橋の手拭屋

(三十二) 手桶賣

手桶賣直が出来首をやつこぬき

(三十三) 納豆賣

大豆を煮し室に一夜して賣之昔は冬のみ近年夏も賣之汁に煮或は醬油をかけて之食京坂には自製するのみ店賣も無之歟蓋寺納豆は異也寺納豆味噌の屬也納豆賣羽織の上で帶をしめ明店へ一聲すてる納豆賣

(三十四) 金山寺賣

金山寺みそは紀州若山金山寺の名物にて江戸に流行出せしは享保年中よりさなむ他州には無長崎歲時記正月四日の條古より延命寺の僧徒金山寺味噌といふを此物につめて檀家へ配る其製唐土の金山寺より傳へたるより家々これを得て珍味とす

金山寺得意はみんな裏住居紫衣も坐禪も荷にこもる金山寺手狭でも朱のひらき戸の金山寺

(三十五) 簇賣

簇賣御健勝でと腰をかけ

(三十六) 糊賣

拙稿「唐柳短解」中に記述し置きたれば

略す。

卒塔婆小町といふ風姿でのりやのりむこれたらしい糊賣首が二つなりあはれさは七十にして糊を賣り碗を小脇にかいたひで糊やのり茶ほうじを釣るした中へ碗さかき品川へ使に行きけるが赤羽のあたりへ行くに急に空腹るくなり、何んでも喰ひたいものと思ふ所へ糊賣が通りければ五十が碗糊を喰ひそろく行く内に日が當つて來れば體かじやきばり、手も足も動かす難義の所へ醫者通りけるを呼びかけ、様體を咄し藥を乞ひければ、ムウ、ヨシくく着物をぬがせ川へさんぶりに浸し奴に着せた。

(三十七) 束子賣

さし賣の差込むだのはたはし賣

(三十八) 火口賣

燧火を打ち付けて火を取るもの〇麻の幹を焼きて消炭ミして用ゐる、又茅花又は班枝花に燧耐ミ煙硝ミを加へて煮て製して黒赤等の色に染むるもありほくちがら火打齒から賣に出る

(三十九) 蕎麥賣

江戸は蕎麥を専らしし饅ごんを兼賣る蓋此擔賣を京坂にて夜啼饅飽云云江戸にては夜鷹そば云夜たかは土妓の名彼徒専ら食之に嬌る又江戸夜蕎麥うりの屋臺に必ず一つ風鈴を釣る京坂も天保以來釣之者あり又三都も饅ごんそば各一碗價十六文他食を加へたる者は二十四文三十二文等也

(四十) おでん屋

夜そば賣 販落者に二つうり夜そば賣猪口で手水をかけてやりけびた風鈴湯氣の立つ上で鳴り夜そば賣立聞をして三聲よび夜そば賣いつの間にやら子を出かしあかぬ戸を外で手傳ふ夜そば賣ゑ、坪へぶちまけてゆく夜そば賣

(四十一) 蕃菽粉賣

七味蕃菽ミ號して陳皮山椒肉桂黑胡椒、麻仁等を竹筒に納れ鑿を以て突刺し賣る諸食にかけて食ふ人多し此賣大阪に異をなす者あり甘辛屋儀兵衛ミ云諸語をよく

し買人の求めに應じて爲之、或は觀物之
 厩で演舌をなさしむ、江戸又城西新宿の
 内藤邸邊を蕃菽の名産す故に江戸にて
 賣之詞、内藤さうがらし云々、因に白粉
 蕃菽には鬼灯花の實を刻み交ひ辛味強き
 を好む人鮮き故也

七色をあつめて辛い世を渡り

句解訂正

前篇十四竿竹賣の項へ

竹賣をよけよけ鯖の御使者ゆき
 を記せしは、カン違ひにて杜撰をお詫す
 るれば俳諧歳時記菓草や江戸歳事記な

ぎにもある、短冊竹賣の句なるは明か
 短冊竹賣「むかしは七月六日市中梶
 の葉をうる明夜詩歌を書いて二星に供す
 或は短尺に楸の葉を用ひて詩歌を書く
 今は民間の兒女五色の紙を剪て短冊さ

しこれに古歌を書ささの葉に結び高く
 屋上に出すこれ竹竿の五綵絲に換るも
 のか昨今市中短冊竹賣多し又近來五色
 の短冊紙を賣ありくなり

鯖の御者は、「江戸時代には五節句の
 一として上下一般之を(七夕)祝した
 り、即ち幕府にては六日に三家をはじめ
 諸大名等使者を以て七夕の祝儀とし、鯖
 代の献上あり、七日の當日には殿中出仕
 の面々白帷子上下を着して、祝儀を述べ
 ること上巳のごとし、當日大奥にてもま
 た祝儀あり」(國史大辭典)で、句意が
 明なるに同時竹賣もわかつてくる

色紙のつくのは若い男竹

「市中には工を盡して、色々の作り物を
 こしらへ、竹こさにも高く出して、人の
 見ものとする事、近年のなははし也」

秋こぬとさやかに見ゆる五色竹
 古今和歌集の秋の部の最初にある、藤原
 敏行朝臣の作、「秋來ぬこめにさはさやか
 に見ねむとも風のおきにそおごろかれぬ
 る」の文句取りで、

物干も年に一度の古今集
 の句もある、吉原は殊に七夕祭を行つた
 ので、
 雀程七夕竹による亮

日本から京の短冊竹がみ
 がある、序に記せば「公事根源」七月七
 日乞巧奠の條に乞巧三申すなり、萩隆は
 腹中の書をさらし、阮咸は竿上の禰を
 手向けしためしも侍るにや」三あるは、
 誤りでこれは書物や着物をほす虫干の事
 である、萩隆阮咸の事は、拙稿唐柳短解
 に盡す、尙ほ七月號の句の誤植は、

- (一) いかさきはいかさま
- (二) 掘り掌ハ握り拳
- (三) 西瓜賣矢狭間ハ矢狭間

——七月四日 蛭子生記——

合本と殘本

「川柳雜誌」の殘本が少々あり
 ますから不揃ひのため合本が出来ず
 に困まつてられる方のためにおわ
 からいたしました。

- 第一卷の殘本 一部 各拾錢
- 等三卷の殘本 一部 各拾九錢
- 極小敷しがないのがありますから至急
 申込んで下さい。
- 第一卷 (合本) 金五圓
- 第二卷 (合本) 金三圓
- 第三卷 (合本) 金三圓



病床獨斷語 (三)

—柳界の歩みと流れ—

木村半文 錢

政治の中央集権を模倣するまでもなく、東京在住の川柳家はその純粹江戸ツ子であるや否やに拘はらず、江戸を中心とした川柳があるが故に、地方の川柳團體を、鼻さきであしらふさいふ奇現象も生じた。亦、實際のミころ、明治の復興せる川柳は久良岐氏や劍花坊氏に啓發されてゐるのであるから、その人々を圍繞せる徒輩連中までが、東京中心をして重からしめた。それは無理もない事である。地方川柳家としては、残念ながら、江戸を知るものが少くない。東京を覗いても、一寸江戸の全盛期を想像するにミツまるので、それ以上のことは、史實を探ねて發見せなければならぬ。参考書は、殆ど地方には稀有さされてゐる。東京へ出なければ何うしても手に入らない。だから、古句の研究を稱しても、東京市民の手を煩はさなければ、到底

不可能な事でもあり、不完全でもあつた。東京の川柳家が、中央集権の威力をもつのも當然であらう。多くの選者なるものは昔の點者のやうに、東京川柳家の仲間につくられた。地方の川柳家がこの威力の下に、膨脹したのは否むことはできない、亦啓發誘導されたのも否定することはできない。

だが、茲で考へなければならぬのは、東京在住の川柳家が、川柳ミ狂句の區分をつけながらも、狂句の畑から浮び出すのに可なりの年數を喰つてゐるのミ、江戸趣味研究は、一部の研究者のみに私されて川柳まで江戸の享樂境地を打ち樹てることが遅々としたのである事の二つである。此の間に、東京川柳家に教示を受けた地方川柳家は、それだけの團體的進歩をした。進歩といふても、江戸趣味中心を意味するものでなく、謂はゞ

地方的の一種の郷土藝術にまで及んでゐたのである。江戸辯の川柳の向ふを張つて、上方語もあれば、バツテンの長崎もあらうし、行こまひ式の名古屋や、ドス本位の京都や、四國、九州は愚か北海道にまで普遍した。近代に及んでは、支那や朝鮮や滿洲方面にも驚くべき流行となり、全く川柳の特質は、各地方によつて分解され、改革され、變改されるやうになつた。その内容は何うあらうとも、江戸の都會藝術が、一般の地方的分裂にまで發展したのである。普遍されたのである。江戸の市民に限定された民衆詩が地方にまで開放されたのである。日本の民衆詩として量的活躍をなしたのである。否、現在に於て爲されつゝあるのである。

だが、前述したやうに、江戸趣味の普遍化には、地方との關係にまで不可能が絶対とされてゐる。江戸趣味が地方川柳家にまで浸潤するには、そこに無理が嚴存する。狂句の後始末が永い間の年を空費した。そろ／＼地方川柳家にも眼が見れて、中央集權らしい氣分に反抗的態度を探るやうになる――。

川柳の實質が、享樂本位の社交的氣分であつたことは、その創始時代の『柳樽』が實證してゐる事は前述した。明治復興期から今日までの柳壇の歩み方は、やはり社交的であり、享樂主義を帯びてゐたことは争はれない。句會の空氣や雜誌の經營なさいを見ても、この社交性は濃厚に現れてゐる。地方に發行され

る専門雜誌なども、社交的氣分から生れたものが可なり多いと思ふ。「川柳は面白い々々」さいふ氣持ちで、川柳を社交の上に見出したのもあらう。「川柳は面白いからやつてみる」さいふ言葉か幾度か社交の席上で交はされた事でもあらうか。

川柳は社交性を帯びて發達した。今日の賑ひを見ることは、多く其の意味から醸されたやうである。併し困つたことには、社交に供される川柳には娛樂氣分が横溢して、さても堪つたものではない。川柳は結局面白いものであるが、それ以上に發達されない。社交氣分での量的發展はあつても、川柳の實質發展が伴はない感みがある。それは、いかなる詩歌でも、それが作らうとする氣持ちは、社交的や開放的でなしに、集中的であり獨創的であるのが常道であるから……。それに今日の川柳家は床屋文學に甘んじるだけの任俠かない。それ／＼の社會的地位や學問の尊さを知つてゐるので、川柳に近づけば近づくだけに川柳の爲すなきを知るか但しは川柳を自分にまで引き上げ了ふ。その中にはほん／＼古川柳に孕まれた江戸情緒なきを穿鑿せず、江戸辯のまき古のみを知つて「つまらない」を棄し、了ふ。かと思へば、川柳に己れを打ち込んで、獨個のものを創作せうさいふ試みが生れて來るものもある。いづれにしても社交的氣分がだん／＼失せて來るのは争はれない。社交に供せられた川柳が、だん／＼三個々の巢に櫛櫛るべき路筋を開いた

のだ。

明治、大正を通じての日本は、歐米文化を急激に攝取した。

この時代に生れた川柳家は聖代の有難さに學問を授けられた。

むかしの川柳家は理論を超越して川柳に没頭したのであるが、

ものゝ見方、考へ方、研究方法に科學といふのつびきさせぬ學

問を輸入したので、自然に智的に發達して行く——もう、江

戸を根據とした川柳味なるものに、疑問を持ち出し、これに科

學的な批判の眼を向ける。大家や先輩の言ひふらした説にも、

同じやうな批判をする。これを見ても疑問の種ならざるを得

ない。軽い失望が生れる。氣の早いものはさつさつ引き揚げて

了ふ。尤も中には、川柳なんてテンで相手にせない頑固での氣

早いのもある。氣力のないのは、先輩や大家と同じ路に立つて

やはり社交的なワイワイ騒ぎを演じる。氣力のあるのは、川柳

を自分のものにしてすふから、むかしの川柳とは似ても似つか

ぬむつかしひものに仕立て上げて了ふ。今日の川柳が新舊に分

裂するのは社交的氣分の存廢に關係してゐる。これは行き詰つ

た日本の經濟的生活に因を發してゐるやうでもある。現代の日

本人が求める處の社交性なるものは、極度に歐米化して了つて

江戸の空氣が醸成したところの、共樂的社交性即ち智識から超

越したものに正反對になつた。社交が智的に磨かれてゐる間は

は成立しない。さ云つて不道德、不倫そのものが江戸の社交に

適合するのでは決してない。理論を超越する處にのみ、江戸の

空氣は生れたのだ。この點は、現在の川柳家は、幸か不幸か、

その何れかに屬するのであらう。

一方、普通に文字を知る人は川柳に近づかざらない傾向が

ある。これは狂句の祟りであることは勿論であるが、直接に影

響するところのものは、やはり「柳樽」に含まれた遊蕩氣分で

あるらしい。柳樽の人情の機微を穿つたものには「流石」に敬服

してゐるやうであるが、それ以上に作つてみやうとする衝動を

受けないやうである。衝動を受けて手を染めた人は、川柳家同

士で言ふ「川柳家タイプ」に倣つてゐる人に限る。さういふ人

は深はよりをする。川柳に流れてゐる社交氣分をふんだんに味

ふからである。文字があつても、智識があつても、この人は理

論を超越して川柳味をたしなむ。斯ういふ人々が集まつて其處

に川柳情緒を展開する。吉原氣分が南地情調なるものがそれ

であらう。殊に歡樂地に置けるもろもろの附帶條件を、悉く

川柳情緒として受け入れる。氣易いころもち、完満な氣もち

に浸らうと思ふ。否、さういふ事を味はふさいふのが川柳家の

唯一無二の特典であるやうに思ふのだ。柳樽に現れてゐるやう

な享樂的氣分は、まさしく斯ういふ處であらうと、無上禮拜す

る。空想と現實との見さかへがつかないやうだ。これが現在の

多くの川柳家の生活だ。或は生活の一部だ。民衆本位としての川柳が、民衆の享樂氣分を極度にそゝりたしたのだ。

享樂氣分に浸り切るこゝ、一時は眼が見ゆない。假令、それが遊興専門、娛樂本位、小さい自己満足に過ぎないにしても、この天地はご人間を惹きつけるものはない。安値も淺薄なユウトピアになり切る。衆と共にのしむこゝふ意識のみが發達して川柳を何うすれば宜いかの理想も希望も生れて來ない。たゞ現在にあるがまゝの社會の渦にもまれて 川柳生活の有難味を説く――。

川柳界の大勢は、既に斯うした歩みの中に危期を孕んでゐた。盲目的な享樂萬能は、うすつべらな諦觀をこり入れた。川柳家は現實により超越した氣分だけが濃厚になつて、其裏面にはいゝ一種の諦觀による人生直面迴避だ。生活は川柳が即一元にならない。みな現實の苦惱に打つ循りながら、川柳といふ無上禮拜氣分に回避する。餘技だ、小閑利用だ、川柳で飯を喰つてゐない――こ結論する。實生活は川柳生活なるものを分離する。それも無理はなからうが、現實苦を回避するために利用せられる川柳そのものは辛か不幸か。餘技にも小閑利用にも川柳はたしかに適應した文學であつた。民衆の中に置かれた唯一無二の民衆詩であるから、さういふ意味での小閑利用、餘技氣分、大いに結構であらう。が、それでは満足の出來ない惱み

が生れる。淋しいこゝを、淋しいから離れてたのしもうさいふても、それは無理なんだ。面白かるべきものを悲しめこ云つたこゝで、それが正しく悲しめるものではない。われ／＼は現實苦を知るがために、人生の大道に直面して、泣き笑ひを演じてゐるのだ――こいふ川柳家もあるが、これらは皆な現實回避か一種の諦觀なんだ。古川柳に現れたる世界へ近づかうこするから、さうした氣分になるのだ。あの共樂世界を實現しやうこして、享樂萬能であるこは、一步、一步、自己の墓穴を掘るこに急ぐやうなものだ。川柳家は川柳と共に享樂世界に没頭して亡びて了ふ――少し大げさではあるが、さういふ事に氣がついて惱む者が生じる。大勢に逆行して自己省察こなる。逆も惧ろしくて、川柳界に共同歩調をこれない。衆と共にたのしんでゐても、自己の思想を如何にせん、こ一步を進めて個に還る。獨個の立場から川柳の世界を建設しやうこする。その波紋が川柳界に流れるこ破壊だ、異端だ、邪道だ、別ものだこ騒がれる。だが個に目覺めた川柳家は、假令、それが一人であらうこも、獨個の世界に川柳の新生活を建てやうこする。民衆と共に溺れてゐてはならない、民衆の一步前、二歩前、三歩前を正しく先驅する――、享樂萬能が思索本位に展開する。川柳は、斯うして實質上に立ち場が變つた。根本的の見方が變つた。寫實主義、自然主義より以上に出でなかつた川柳に、哲學が根を

下ろす。ベルグソンやカントやシヨツベンハウエルが現れる。ダタイズムや表現派や未來派や構成派が飛び出す。古川柳本位を既成精神だといつて片つばしから破壊する。打ち破る、凡ゆる近代思想をきり入れて、川柳界の黎明の鐘を亂打する。舊物を破壊する意力は火になつて灼熱する。建設精神は宗教家の受難者にも似て偶像を、ぐわらりご打ち破る。川柳界は正しく蜂の巣をついたやうになる——。

光りは東方より——の黎明を現在の川柳界は意識してゐる。溺れてゐた過去の遲滞を取り戻さうとして、個々の生命は奮みを開始する。むつかしい川柳が生れるさいふのは亦やむを得ない創始期だから、理解の出来ない川柳の現れるのも、亦、止むを得ない。それ／＼の意義を含んで、凡ゆるものに川柳の基本精神を建設しやうとするのであるから……。ざつぜん、混然としてゐる波紋の中に、必ず川柳の本來の生命は宿つてゐる。よし既成川柳は根本的に亡んで了つても、新しい世界は其所に展開しやう。正しい者の運動は、究極に於て勝利だ。よし、中絶し、後繼者を見失ふても、そこに正しいもの、生命は、永久にさんぜんとして輝いてゐるやう。個は個に深まりつゝ、永劫のいのちを顯現する——革新と保守、黎明と傳統、思想と無思想、享樂と科學、正道と邪道、先驅と漸進、純理と愛情等、等、この解決のために、今、川柳界の大勢は二大別された。正に對陣

の形だ。民衆本位の川柳が、さう個的に展開して行くか、それは將來の問題だ。

傳統保守の立場から、さういふ復古的活躍が生じるか、それも將來の問題だ。否、共に現實に直面した重要問題であらうとも想ふ。いづれにしてもその歸するところは川柳を愛する川柳家自身の良心的あらはれでなくてはならない。其所に川柳を毒する野心的跳梁が存在してはならない。

私は床でこんなことを考へて書きつゞけてみた。讀み返してみたが手をいれる氣力も起らない。それでこのまゝ發表した定めて讀みづらいことであらう。こゝは筆者が恐縮しておく。

大磯より (霞乃宛寄せ書)

昨夕二兄が來ました。面白い大阪の話に花が咲きました。

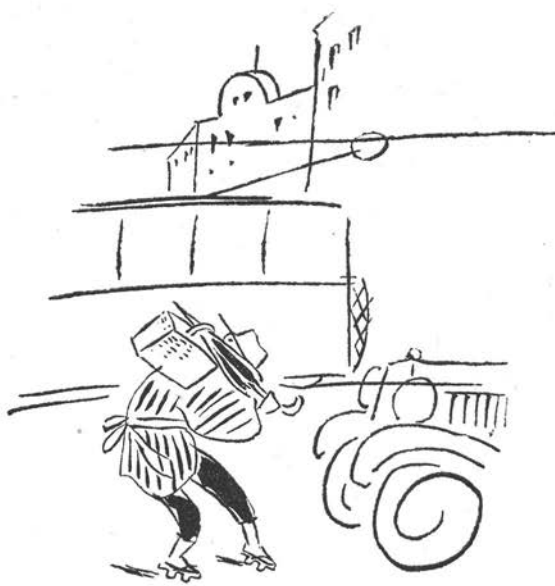
(駒人)

やつぱり濱寺がよいのです。あゝ完備した處はありません東では外海のため波が高いのです。しかし面白くはありませんが、悪いことには柳も駒も泳げないのです。水泳着は立派なものでした。中々心得たものです。十六日の夕は海邊を迎りました。月は照り、月見草は咲いて一入よろこばせてくれました。——千代二——
さすがは大磯、毛斷ガールの多いにおそろきました。三人はボートに乗り、聲高らかにハシヤギ終日カツバになりました。(柳路)

川柳 累卵の遊び

路 郎 評
柴 舟 畫

大阪は轆れかけても好い所 かほる



(四)

大 阪 の 圓 タ ク 地 獄 も 考 へ や う に よ れ ば 、 二 百 十 八 萬 分 の 一 人

が 轆 し 作 さ る べ き な り 。 さ 思 へ ば こ そ 涼 し き 顔 し て ゐ る べ き 也 。
な か へ び に よ き 度 胸 な り 。 あ 、 歡 樂 は 渦 卷 き ぬ 。

書 置 の 船 長 様 と 書 き 終 り 露 斗



淡 路 島 見 ゆ 。 佳 人 死 の 平 靜 に 歸 ら ん じ す 。 わ れ は 三 々 め じ 。 死
に たい 人 は 大 い に 死 な さ せ て や る べ き な り 。 死 に た く こ も 死 に
得 ざ る 人 々 の あ ま り に 多 き こ の お か し け れ ば っ
芥 川 の 遺 書 に 曰 く 。 生 か す 工 夫 は 絶 對 に 無 用 な り じ 。 脊 々 服 膺
す べ き な り 。

手を逃けた六神丸を子に頼み 案山子

ただ頼め花もはらくあの通りミ一茶は他力本願也。老ては子



に従ふべき也。ただ頼むべきなり。豈手を逃けた六神丸のみ
ならんや。

行商の留守へ男の子が生れ 眠聲



柳樽の初篇に

乳の黒み夫に見せて旅立たせ
の句あり。行商人の妻も又然せしや否や。



川柳塔

○ 庄 萬 よし

松江吟行(二句)

氣がつけば二人の前に出雲富士
發動汽船に戀を忘れた朝の音
やりすぎた事を叱るは憎からず
撒水の電車も濡れる俄雨
はち切れる力を青樓でみこめられ
稻光りですかご座頭揉み續け
鬘を脱ぐは忠兵衛禿けてゐる
ボテ鬘斯の如しご鬘賣
○ 松本助六
支那鞆世帯と同じ色に老ひ

をそいで向ひにやれば立ち話し
一ツ賣れた元氣鉢巻を直し
辻折れて水を撒く娘に家をき
腰巻で脱ぎ散らかした中に居る
實直へ妻の相談かけてやり

○ 岩崎柳路

新柄へ諦めて居る女店員
御前様十五銀行をちご恨み
膝枕銀行の事ふご思ひ
不景氣の話に社長馴れ切つて
畫のやうな家で賣つてるガソリン屋

○ 中澤濁水

熟慮から斷行までの氣が鈍り丸鬚が何か讀んでる藥店精米所穴を掘つてるかたち也俄雨俣を下りて馬鹿らしく先生の兒を小使が抱いて來る氣に入らぬ兒が硝子戸へ○を描き俵給日あこは寸志のやうな氣で

○ 安西 杏三

舞姫の唇だけが目に残り夏の陽を草はね返しはね返し

○ 三好 革郎

ちつほけな石こ侮り仆される無いものがまた絞られることになり忙しい顔をするのが自慢なりグレンシャムの法則が餘りのさばり

○ 高橋 かほる

丸鬚で松江の宿に二日居る

○ 奈良 井仙坊

嫁が島ふさわしくない波が立ち

和田見通ひまだ大丈夫橋があり

○ 檜山 千代二

幸運さとりとめもなくほめられる開店に親といそしむ君さなり

○ 津田 耕水

まともには見られぬ事を強ひられる猛優のやうにオートバイ走り

○ 麻生 霞乃

香を焚いてまぎるる事も凡夫なるお茶のこを買ふ三越さなりましたおしの弱さを宿無し犬にみぬかれるわれのみの世界にあらず松は松夕立が晴れてお寺の冷やつこ

○ 橋本 二柳子

○ 松江 吟行 (三句)

宍道湖の廣さへツバメ落ちるなり嫁ヶ島流れて來るのかと思ひ涼み船みな安來節唄ふてり結局は損ミ算盤下に置き

失望もせずごみ箱を漁つて居る
防火の設備あれではあつからう
嘘よ嘘よご女の子だまされぬ

粒々集

○ 金澤 安川久流美

柿の實の朽ちてゐるのは蜂の罪
をのくが面を冠つて生れ出づ
まばらな髭を撫で、言ひ譯
ためらうてゐるご御飯の時が来る

路 耶 兄 へ

夢にあふ無言の君の健やかさ
私服の陸軍大尉で子煩悩
御自慢の裸に黒い毛ご黒子
團扇へ樂書大分酔ふてゐる
先生の額の汗も金になる

○ 神戸 楳元 紋太

眼 覺 時 計 狂 ぶ

眠覺ましを頼みに夫婦寢てるなり

眠覺ましをかけるも永い慣ひなり
眠覺ましが頼み甲斐なく停つて居
眠覺ましに關係のない子の寢息
あはれく時計も狂ふ時があり

(昭和二年七月十二日作)

○ 大連 中野 柳陽

ほめられて居る正直へ氣がつかず
薙をばらくにして猿の顔

○ 大阪 木村半文錢

足利の天下は亂れ 漏とほけ刻
審かしや疊の上に切利支丹
焼豆腐 眼には廣大無邊觀
まだ死なぬころは阿字の門に立ち
蜜ハチ蜂の蜜ハチより二十ハチ一世紀
銀ハチ行ハチの壁の向うにきりくす
蟻ハチの巢ハチに土一升を積み乍ら



柳 評
樽 釋
廿 四
篇 まで (六)

麻 生 路 郎

(三) 初 篇 の 句 (續き)

姑 々 違 ひ 舅 の い じ り や う

これ位、巧妙に、婉曲に、舅の戀を皮肉つた句はあるまい。嫁たるもの貞ならんミすれば孝ならず、孝ならんミすれば貞ならずか。

駿 河 町 疊 の 上 の 人 通 り

この世の思ひ出に越後屋をのぞいた女客もあつたらう。故郷への土産話に越後屋の疊の上を踏んだものもあらう。錦繪から抜け出たやうな美しさを競ひに來た美人もあつたらう。兎にも角にも越後屋の疊の上は往來を聯想させるほどの人をもつて埋められてゐたのである。そこをみつけたのが此の句の手柄である。駿河町は越後屋(今の三越呉服店の前身)のあつた町名である。時代が少しかけ違つてゐるのミ、江戸ミ大阪の違ひは別として、店のしきたりなきは、一脈通するものがあらうと思ふ

(或はおなじであつたかも知れぬ)ので、大阪「三越呉服店」幕末前後の三井呉服店に十五年間奉公をしてゐた内田茂七(セツ)といふ老人の話を「大阪朝日」から轉載しておこう。

「幕末ごろの三越は三井といつて京都の室町に本店をもつてゐた三井八郎右衛門さんの經營で「越後屋」といひ、場所はやゝ高麗橋一丁目にありました。戎屋とか岩木とかいふ大きな店と共に大阪の三大呉服屋で穴倉が三つのほかに七棟の倉はまるでない、氣の荒い若者ばかりの女人禁制の店です。いまでもすまじきものは宮仕へ、つらいは船場、島之内の丁稚奉公といふくらいだから、何がして權威の高い大三井の、しかも今から六十年も前の店だから奉公のつらさミ家憲の面倒なことはさてはお話にならない。まづ最初丁稚奉公が三年、それををはる金額にすみをに入れて又三年、それから「若者」といふのになつてこれが三年、「若者」になるミ店から大けんたいでお茶屋遊びにやつてくれる。このつぎが「若者頭」でこれも三年つぎめる、するミこんきは「上座」いふのになつては

じめて茶碗で飯が食へるやうになるんで、これまではみんなお椀で食事をする。外の人があるまゝで門先に立つて食さいつた形ですね、「上座」を更に三年修業するまで「組頭」になり旦那の定紋を一つ頂戴におまゝではじめて羽織が着られるといふ段取りで、暖簾わけして別家するまでまる二十四年つこめなければならぬ。朝は五時にたゞき起される。夜は支配人さんの足腰をまさされるさいふあんばい、今日の商家のやうな月に一度の二度のさいふ公休日なんて贅澤なものはない。正月には「若者」以上はお茶屋へやつてもらふのがこの上ない楽しみです。お茶屋は九郎右衛門町の「京町」さいふ家でこちらは文字通りの若者であり、藝妓のなかにも今のとちがつてなかく、狭氣肌のがあつて、若い同志が深くちぎり夜になるまで店の反物をほさいて繩梯子代りに塀を越えて店をぬけだし夜のあけかたなに食はぬ顔をして歸つてくるさいふのがかなりありました。二月は芝居見物でたいい角座か中座四月は尻無川尻の蛤まり、五月は住吉詣でさいふ恒例、さころが明治八年七月八日のこご、店の棚卸の賣出しをすまして若い者たちがお酒の御馳走になつてゐる満座の中へ突然覆面に抜身の長刀をさけた怪漢三人がドヤ／＼とあらはれた。ワツ／＼と一同が總立ちになつたが酒がさすこし廻つてゐるものだからそこいらの物をさつて抵抗するさうも斬つてかゝつた。私は立上る拍子に、これこの首のうしろに大ききすのあごがあるさほり、ズバリミ斜に一太刀やられました。夢中で倉の入口まで逃げましたがあごはほさんご亂闘でおほいませんが、そのうち一人の強盗がたうさうみんなに追ひつめられて井戸の中へ逃げこんだので上から蓋をして押へつけたが刀で蓋を破りみんなを威嚇しながら逃げました。大げがをしたものは私の外に六人でした、強盗は金貨二萬七千圓を強奪逃走しました。明治十三年十一月十四日三越さなりましたが、こ

のさき多少人員の整理をやりましたので私は金千兩也を頂戴し二十六歳で十五年間の御奉公をやめました」云々。
ちつほけな桶で鑄かけは手を洗ひ

寫生句としての面白味がある。のんびりしたい、感じが出てゐる。前にあつた「鍋いかけすてつべんから煙草にし」の項を参照されたい。

小間物屋箱と一所に年が寄り
薄い箱を幾つも積み重ね、それを大きな風呂敷に包んで、背負つて歩いたのが昔の小間物屋であつた。自分の小さいころには未ださうした姿をよく見かけたものだが何時のほきにか姿を消した。

昔の小間物屋がさんなきやうがいにあつたかは此の句によつてよくあらはれてゐる。皆が皆さうではなかつたらうけれども小間物屋は矢張り小間物屋で死んでゆくよりは仕方がなかつたのである。今に／＼でいつのほきにか老ひ込んでしまつたのである。箱も又手ずれて、うすぎたなくなつてしまひ、主人運命を共にしたのである。

若後家の刺りたいなとむごがらせ
添ふて間のない夫が亡くなつた。いつそ尼になつて、亡き夫の後生をさむらひたいとは若くして後家になつた者の切なる願である。女が尼になるこごは生きながら死ぬるこごである。死ななくともなんさかなるさいふが周囲の人々の聲である。此の場合五の「むごがらせ」は、この女が十人並の美しさをもつてゐるこごをほめかしてゐる。初篇の中には又

若後家のふしやうづくに子に迷ひ

こいふ一篇の哀詩もある。

惣領は尺八をふく面に出来

惣領の甚六は面長でなんきなく顔にしまりがないので斯くは言つたのである。尺八を吹く顔こいふものも間がのびてゐて、あまりみつこいゝものではない。一寸捉へてはゐるがこんな句が所謂川柳の巧い句ださかいゝ句ださか思はれては困る。

乳の黒み夫に見せて旅立たせ

駕や馬で泊り／＼を重ねてゆく昔の旅には多くの日数が費された。今のやうに東京大阪間をスリーピングカーに揺れながら着くこいふ譯にはいかなかつただけに戻つて見れば子さもが出來てゐるこいふやうなこも稀ではなかつた。誰の子だか判らないさいふところから悲劇もなされた。それで旅立つ前の夫に乳の黒みを見せたのである。微妙な穿ちの句である。

盗人にあへばとなりでけなるが

氣の毒がるより、けなるがるところに人情の機微がある。家でも早く盗人に奪つてゆかれをほごの結構な御身分になりたいものださは、けだし貧乏人を代表した聲であらう。

その手代その下女晝は物言はず

技巧で出来あがつた句で、こいゝ句ださは云へない。句意は同じ店の手代下女が水を汲んでやつたり綻びを繕つて賣つたりしてゐる間に、いつしか嬉しい仲になつてしまつたのであるがさうなるさ却て普通以上にさく／＼しくして口をきかな

くなつた。そこを捉へたのである。

おなじく初篇のうちに

朋輩を寝しづまらせてくけて遣り

こいふ句がある。これも又、その下女の動作を詠んだのである男のために一時早くくけてやりたいが朋輩が起きてゐてはそれもかなはぬ。みな寝しづまつたのでヤレ嬉しやさばかりにいそ／＼してくけてやるのである。戀は曲者である。愛を表現するここの如何に苦心を要するものであるかを思はされる。前句よりも後句の方が人物を躍動させてゐるだけに巧ださ云はねばならぬ。

道問へば一度にうごく田植笠

これは、前にあつた「ひんぬいた大根で道をおしへられ」さ同巧異曲の句であるが、早乙女の笠の紐の赤さなさが想はれていささか艶つほい。

碁敵は憎さにくしなつかしさ

「この一目を待て」「イヤそれは待しぬ」「そんなケチなこを云はずに待つたらいゝぢやないか」「何がケチだ」「ケチだからケチださ云つたのがさうした」赤目を釣合つてから暫く往來をしないが、ものゝ二三日も離れてゐるさ、あゝは云つたものゝ別に喧嘩しなくても濟びこなんだ。さうしてゐるか一遍覗いてやらうさ出かけてゆく。片方も退窟で退窟で閉口してゐるさころだ。一人で石を並べて見てもすぐに飽きてくる。恰度困つてゐるさころだ。二人は顔を合はして黙つて盤面に向ひ合つた。パチリ／＼こいふ石の音が聴て外へ洩れて來た。



宗春といふ人

佐々木桂雨

尾張に於ては遊女は、初代藩主義直より許さず、代々此の遺法を受継ぎ、大阪に於て遊女を追放したる時、一夜の宿さへかすべからず云ふ、觸の出た程恐ろしい魔物として取扱はれてゐた。しかも元祿の餘弊未だ改まらない時、突如として所もあらうに尾張に於て遊廓を公許した、其人は實に尾州七代の藩宗春である。宗春は果してそんな理想を抱きそんな人となりてであつたであらう乎。

宗春を非難する人々の一つの材料は彼が、夫人を置かずして侍妾のみをたくはへ、あまつさへ吉原の遊女を根引して手植の花さしてゐたことである。しかもその豪壯なる見越しの松に黒塀園ひの家には(牛込外山の道家敷現在の戸山學校)東海道五十三次を模したる庭をつくり日夜管絃の音たゆるなく、その遊樂に寧日がなかつた。

その遊女の名を三浦屋の春日野太夫といひ、仙臺高尾三橋原高尾を加へるといひ三幅對であつた。宗春は録々出府もせず、尾張屋仁左衛門の假りの名をもつて、悪友播州白鷺の城主榊原少輔政峰(別名を播磨屋十兵衛といふ)をそのかしの流連かうほうし、その果は根引して困つた事にある。此の事件を古川柳は、好むで詠むでゐる。

御放埒春はべつ甲秋は伽羅
中將は其後も春日野へ通ひ
べつ甲は伽羅は榮華の沓冠
春日野は東海道を八文冠
駒下駄で越すはお庭の箱根山
笠も下駄も三浦は派手ごと
春日野へしかも名高い一人客
お切戸があくごお庭の日本橋
百餘里を其日歸りのお慰み
駒下駄の旅は外山さ仲の町

(省ニ曰類吟は略す、川柳吉原志五六頁：六〇頁參照の事)

この春日野太夫のゐた三浦屋といふは、寶曆の頃まであつて太夫の部屋には葵の御紋がニガイ顔して、あちこちに配されてゐたさうである。

かういふ性情を一面持つてゐる爲に、上國後歌舞音曲遊廓を許し自ら踊りかつ色里へ微行するごときは、宗春にまつてみれば大した事件でもなかつた。十八年四月上國の時、夜中鳴海を發して、葛町際で乗物を降り少人數の御供をつれて西小路遊廓に微行し、觸れもなくして城へ入つたごときさへあつた。彼にしてみれば藩王といふ言葉が、義足のやうにイヤになつたかも知れない。

これより先享保十六年九月、上國して半歳もたないのに、國禁も云はれてゐる遊廓を御三家の一つである名古屋に許し世人をアツク云はせた。

抑宗春は尾州三代の藩主綱誠の第二十男のしんがりに生れ幼名を萬五郎或は水馬と呼び、長じて通春と改名し、享保十四年五月奥州梁川の大久保家が絶つたから、三萬石を眞藏に及んでこれを繼いだ。ところが享保十五年十一月二十五日に六代の藩王繼反かはしかを病んで死んだが、嗣子がなかつたので、通春が異母弟の血縁から白狐の矢が當つて目出度く尾州家の七代を繼ぐごこになり、同十六年正月に、吉宗より一字を賜つて宗春と改めた。

今茲に宗春の所謂奇行の二三を概説せむに、宗春上國後の施

政はすべて一新され御側の者の衣服は勿論小姓の髭の結びぶりまで變化し、御役人詰所の麗々しい壁書はすべてはがしさうして宗春の床飾りには枕草紙かるたの類が置いてあるといふ事さへ噂されるに至つた。

享保十六年五月朔日には前代權友が禁じた刀指しての芝居見物の儀を「刀指は足輕、徒士、若黨、鎧持なきのごこなるに今之れを諸士同様の取扱をなすは、吟味の不行届、他國への聞にも然る可からず」といふ理由をもつて自由に見物せしめるごこをゆるし、この日御側同心の成瀬豊前は芝居小屋の前に立てあつた制札を遠慮なく抜いてしまつた。

又藩王が一度國に着くご、府下の代表的神社佛閣に報告參りをする事になつてゐる、やがて參拜の日が來るご、宗春はその白牛に悠々打ちまたがり猩々緋の裝束で乗り込んだ。又ある時はかごにも乗らずに、一國の主がヘンな頭巾をかむつたり煎餅のやうに卷上つた唐人笠をかむつたりして參拜せられ、時には五尺ほさの煙管を奥御茶道家にかつがせて練り込んで人を煙に巻いた。定光寺の初代藩王敬公の墓を訪ふたごきでさへ白牛に跨つて行つた。

さうしてそのお歸りが夜になるご、町々辻々は提灯を掲げ、町家の軒には思ひ／＼の趣向をこらした掛行燈を出し、町の境界を判然として町三町三が争つてこのイルミネーションに凝つた。その後は御參詣の歸途に限らず、宗春が一步外へ出れば道路の者は提灯掛行燈の他に造り物なきして殿様を喜ばした。

享保十七年三月、上國後はじめて江戸へ下る時は、先祖傳來の虎の皮を羽織に仕立て、これに銀の金物にて葵の紋を入れ、頭巾は長さ三尺もあるのを冠つて、馬上ゆたかに國を發つて行つた。越つて十八年上國後も依然として奇行はやまず、五月の熱田神宮參拜の節は、大中納言以上の装束をつけお供には俄矢大臣を引具して行つたからたまらない。神宮の方ではその装束を見て、急に座所を變更するやら大狼狽をして、漸くこの醜興殿様を迎へた。

又ある時の建中寺參詣は、本町御門より京町通りを紅色の装束に、緋縮緬のく、り頭巾で天井抜きに籠籠に乗つて行き、そのかへりは羽織も袴もなく白練の着物を着流して、長さ二間もある煙管でタバコをすひその先を奥御茶道の小野田玄格にかつがせて、時々煙を輪に吹いては屋敷へ歸つた。これが巷説にある宗春の「夏きせる」さいふのである。踊りは宗春も好きであつた。齊子八百姫が十六年七月十二日早世した時、恰度盆の遊び時を謹慎さした代りに二十四日と八月一日を盆の通り踊り狂つても構はぬといふ觸れを出してダンスを奨勵した。又ある時は自分の下屋敷に町中の踊り子供を集めて踊らせたり、御深井濠に時ならぬ津島祭の提灯船を浮かせたりして嬉しがつた。諸彼れが尾張に遊廓を許した理由を、幕府に對する反感のみを観るよりは、その肚裡を正直に理解して寧ろ遊興所といふものが市民生活上に必要な一つの存在であるといふことを知つてゐる爲ではあるまいか。彼自身吉原の遊女を身請する位であ

るからそれ位の下情には通じてゐた筈だ。その宗春の遊興所を許した眞情を記したものに「御断書」さいふものがある。

「一、此頃若者共野良遊にて欠落致し、一旦血氣に任せ難儀の者之有旨御耳に達し、左の思台にて御書付出る、總て人さいふものは、老いたるも若きも、氣にしまりさ、ゆるみなくては、萬の事動かたく、中にも好色は本心より出る故、飯喰も同じ事也夫故、其處所なければ男女しまりなし、平生召仕候女も、却つて遊女のごま成、おのづから不義も多く出来、家の内もさゝのわす云々、情理を盡した長いもので、流石に人情の機微にふれてゐる丈に、宗春の遊廓免許ステートメントは、一點の非難の打ちどころがない、即ち彼の民衆的の遠大な理想は、當時の人士には一寸理解が出来なかつたかも知れぬ。私は享保十六年三月著はした自序のある、「温知政要」一巻をみて、彼れの本性的思想を發見し得たのである。

一方宗春の放漫政策と奇行とは、彼の眞情ではなくして、幕府に對する反抗からだの理由とする處は、六代將軍家宜は健康を害し、或は回復覺來なきやもはかり知れず、臨終にのぞんで將來のこゝを云ふのは往々誤ちのあるこゝがある。それより病のひま／＼に言つて置かう、さ考へ先づ第一に嗣子の問題について、自分の子家繼はまだ幼年であつてても一國の主宰者となる譯には行かないから萬一の場合には尾張四代の藩主吉道に將軍職を譲らん、と思ふがさうか、新井白石に諮つたところ白石は正當なる嗣子があるのに、他家からこれを迎へるこゝ

ふとは應仁の頃のやうに必ず天下の人は其黨に相分れて亂れるに違ひないから、幼年であらうとも家繼をもつてその職に就かしめなければならぬと進言した。

家宣もそれを承認して、第七代の將軍は家繼といふことに内定し正徳二年十月家宣薨するや四歳の家繼を立てたのであるが不幸にも在職四年にして家繼も夭折してしまつた。こゝで將軍家の正統は全く根を失つたから、繼嗣問題はやかましくなるに至つた。そこで家宣の夫人天英院は、水戸の綱條、尾張の家繼、紀州の吉宗の三人を臨時召集して、閣議を開きそれらに徳意

して見たが、幕府は可なり苦しい時であつたから誰一人、この大任を受けやうとする人はない。殊に内々擬せられてゐた紀州吉宗の如きも「門地をもて申さば尾張殿、年齢をもて申さば水戸殿こそ、このたびの重任をば承はり給ふべけれ、某に於ては更に思ひよらざる事なれば辭し奉るなり」と斷つてしまつた。併し、この三家の家で引受けなければ他に持つて行き

ざるのだから、頭下しに命じなければならぬと決心して最も適任と認められた吉宗公に王冠を興へてしまつた。

しかし尾州の方では當然繼友が就職するものだし一人ギメシてゐたから疑心暗鬼を生み、これは紀州家と大奥とが結託して將軍職を乗り取つたのだと解釋して、國を擧げて失望と怨嗟と呪咀の叫びをあけるに至つた。

而してこんな巷説まで生んだ。宗春が江戸のある街を微行中、ふ

と鍛冶屋の前を通りかゝるに、内からハンマアの音雄々しく「天下取れ、天下取れ」と聞けて来たそこで宗春は莞爾としてしばらく佇んで聞き入つたが、やがて天下取れが歇んだと思ふに急に「紀州、紀州」といふ水音が聞けて来たので宗春は不快の態で立去つたといふ話である。勿論これは作り話に過ぎないが、斯様にまで繼嗣問題は喧しかつた。又繼友が江戸の邸で癡疹で覺じた時も、吉宗が人をして害せしめたのだといふ流言さへ放された。

後世宗春の理想が何であつたかを想像する人々が、期せずして一致する點は、前記の如き緯經から時の幕府に反逆し、名古屋以西を自己の配下にし、名古屋を三都以上の大都會にすれば自然人心は、名古屋を日本の中心地とするであらう、さうすれば幕府は有名無實のものとなり、金鰐城のみかゝり、輝くに

至るであらうといふ如何にもロマンチックな理想であつた。宗春がさういふ理想を抱くと共に、實際者たる名古屋以西の諸大名の懐柔策を講じてゐた宗春がいよく隱退と決定した時な

き早馬で馳つて来た人々が可なりあつたさへ噂されてゐるしかし、彼の放漫な政策も、放縱なる生活もが吉宗の忌諱に觸れて元文四年正月十二日人々はまだ屠蘇の香に酔つてゐる時唐突として隱居謹慎の命が下つた。

命が下るや家々は戸を閉ざし冠婚葬祭は勿論遠慮し、街行く人の數も少く、咳拂ひ一つ聞けなかつた。時に宗春四十四歳。七代の榮冠を宗勝に譲つて彼はひたすら謹慎の生活を續けた。

二十二年(寛政十一年四月)漸く父母の靈を拜するこゝを許されたが、明和元年十月八日薨じて後も尙罪は許されず、市内東區筒井町の建中寺の墓碑には金網が張つてあつた。天保十年十一月禁錮を免ぜられて、從二位權大納言を贈られこゝに漸く青天の身となつて金網も撤回された。しかしそれは表面の事で、事實は尾州十一代の藩王齊温が薨じた時、幕府は突如として齊莊を命じたから、一應の相談もなくしてわが藩の大名を定めるのは幕府も餘りなりこいふので喧々囂々非常にうるさい問題になつた。そこで幕府は人心を緩和する意味で金網を撤回させたこゝいはれてゐる。

藩主としての執政上、宗春の缺點のあつたこゝは論を俟たぬが、一面又彼の軟派政策によつて、これ程名古屋がいんせいになつたか云ふ事も忘れてはならぬ。嗚呼宗春はきよほうへんを外に二十餘年を孤獨に暮らして江戸の邸に於て寂しく死んで行つた。もし宗春が尾張七代の藩主を嗣がなかつたならば今日をぞろ二百年の昔を回想して、私の腦

犬山民謡と踊



柴谷紫舟

裡に美しい都を再現して呉れるこゝもなかつたであらう。(完)

經子省二記

私が川柳行脚の歸途、岐阜縣惠那の金龍温泉へ、病後の身を寄せ愈々去らむとする朝、「新愛知」新聞をみるに、「享元三廩話」の一が目に付いた。親友川柳家桂雨氏の稿である、そして八回に互り研究の一部を發表され、續稿は機會をみて掲げられる事になつてゐる。

「宗春さかいふ人」は、川柳家がどうしても詳に知つて置かねばならない、私は十數年前から郷里關係の史實でもあり、手をつけてみたい、せめて名古屋の川柳家により致を垂れて貰ひ度いご熱望して居たが、身は常に殖民地に在つて思ふのみで打過ぎてゐた。今計らずも桂雨氏が豊富なる參行書に依り、實蹟して極めて通俗に書下ろして下さつた事は、朝暎の慈光に接するの思ひがあつた。因て本誌に抜載し此悦びを多くの同志にわかつて、御打合せした處承諾を得たので、私が勝手に文章を短縮し前後を置き替へ、即ち雜誌向きに此の稿を綴る事にした。元より本文を毀げざらむ事に努めたけれども若し不明の箇所あらば、私の罪で桂雨氏と讀者に謝さればならぬ而て私の手元に新聞は保存してあるから、何時にても御申越し次第回覽の便を計りたい、題は「享元三廩話」中の一目項に、名付けられたもの其儘である。

募

集

句

相談

篠原春雨選

男を立て、ご相談を強いられ
相談をするにもたつた一人なり
相談へ早や女氣の涙ぐみ
長火鉢お女將は腹を割てみせ
それとなく身の振り方を持
うつむいて今度會ふ日を相談し
相談によつては貯金出す云ふ
顔色を見てから相談する氣なり
相談をうけて困つた顔になり
相談をうるさい云ふ兄であり
相談で小間使の仲を割き
相談に分別顔が異議を立て
相談がうまくいつたと大あぐら
子を分けて相談つきの離縁なり
相談の中に智惠者の一人ゐる
相談の結果はやはり電車にし
秀才へ高飛車にくる御相談
相談へ啜る熱い茶冷たい茶
相談が大きくなるご會議なり
相談があると社長の冷い眼

ト柳
石竹
眠聲
羊司
彩秋
恭二
光路
粹浪人
柳秀
綠葉
逸紅
竹雪
若人
盜鐘
太路
進一郎
突支坊
呑陽
錦魚
みなご

相談に且那の聲がする許り
出來合つた後で相談持ちかける
相談は終へず手附けを持ち歸り
相談に來た警察で尻が冷む
菓子も茶も切を相談やつと出來
延びくになるのは金のいる話
相談をすればまよよせと云ふ
相談の相手ウン／＼言ふばかり
相談が出來る息子になつて死に
相談はそう言ふまで下駄を履き
酒が出て相談事に實が入らず
町内の寄合今日もたゞ別れ
相談に妻君ふい／＼席を立ち
月末も近く妻から口を切り
相談も出來ず二人は離される
相談のどん／＼更けてゆくばかり
妹のこゝで兄さん呼び寄せる
相談をしてみませうご遊びを
實は今其の相談で來た譯さ
相談に來ると先客込んで居る

鎌月
花蝶
北山人
郊村
醉夢
志郎
普天
松雨
夢人
聞路
春陽
惣多樓
微苦笑
文童
默童
鮎美
赤城
源坊
天花
秋晴

川柳家の戸籍調べ

係馬行生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所
(五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八)
好きなタイプの女 (九) 自信の句 (一〇) 川
柳以外の趣味 (一一) 配遇者の有無 (一二) 嫌
ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

村上餘念坊

(一) 村上米造 (二) 散華庵餘念坊 (三) 田邊
南翠 (四) 横濱市青木町二〇、舊東
海道神奈川宿 (五) 明治二十四年六月廿一
日生 (六) 本職通俗講談士 副業 (モスリ
ン屋) (七) 澤山ありますが、さて此處に
一二句特に引抜くとならざる聊か困惑を感
じます (八) 現代式でない色白で肌の細が
い丸ほちやが好き (九) まだ堂々と發表す
る程の句が無いことを大井に恥ます (一
〇) 乗馬 聯珠 (三段) (一一) たつた一人
有り (一二) 酒、煙草、ブルジョア、トマ
ト、浪花節、生命保險、オートバイの爆
音 (一三) 明治三十八年九月頃若輩仲間
肉筆の文藝誌「七五集」を月刊、回讀して
楽しんでゐる時、詩歌欄に川柳も加ねた
のが始まり。餘念坊の號で専門川柳誌へ
活字になつて現はれたのはそれからすつ
ご後の大正二三年頃の「大正川柳」誌上

(五七) 清水美江

(一) 清水策治 (二) 美江 (三) 翠峯、朔二なき (四) 埼玉縣比企郡松山町 (五) 明治二十七年六月十五日 (六) 月泣鳥 埼玉縣土木技手 (七) 新しすぎて凄い賣家なき好きです。柳樽より武玉川の方に共鳴する句が多いやうです。三太郎氏、きん坊氏等の句風が好きです (八) 背丈も相當にあつて日本髪の似合ふ女、桃割の娘も鳥田の藝者も丸鬚の奥さんも、九かなり自信の持てる句は相當にあるつもりですが是が不朽の名作だと自惚れるだけの大膽さがありませぬ。ですからこゝに二句三句是が自信の句であると發表させて戴く事は遠慮致します。日本川柳新聞に「暴落々々々物價釣瓶落し」と云ふ句がありました。斯う云ふ句を自選代表句として發表し得る勇氣ある方に遙かに敬意を表します (一〇) 俳句、短歌、園藝、小説を寢轉んで讀む事、其他いろ／＼あります。が人に誇るべきものは一つもありません (一一) 妻の名は澄子と云ひます。子供(男の子)一人と三人暮しです。子供の名は輪(タカシ)、と云ひます (此項聊か餘事にわたりました (一二) 病氣(ふだん弱いからです) 煙草の煙、惚れた女でも煙草を傍に吹かすと百年の戀も冷めた位 (一三) 大正七年。その頃の句に「蜘蛛の糸光の

相談へ妻も襪をとつて入り 濁水
相談相手にては無く兒と暮し 同
もらつたと見えて相談には乗り 金鐵子
相談を終へて百札渡し 同
こゝまでは相談らし話しかけ 一路
相談にちこむし暑い蚊帳を出る 同
うなづいた相手心得顔で去り 千鳥
あす着るへ相談するも女にて 同
相談の仕度い亭主は酔ふて居る 助六
相談の中の一人は風邪を引き 吐瀉樓
善後策ピツシやり閉中に座し 同
相談に六法全書要る日なり 同
相談を延び／＼にする使ひ込み 萬よし
辻占に出来ぬ相談かけて見る 同
眞蒼な顔で相談に來たと云ひ 同
相談は費用のこゝで皆黙り 同

漁師

青訓所漁人ばかりを持て餘し 勝一
大漁の聲勇ましく櫓がそろひ 濁水
綱引きを手傳つた漁師魚をくれ 柳
漁師ふと女房の事が氣にかゝり 眠聲
鮑丁だ／＼漁師たとこに逢ひ 石竹
大網の不漁娘は嫁き遅れ 綠葉
漁場より歸り淋しき人となり 竹雪
宵節句と云ふを漁師は虫あさり 北星

俯向いた方が相談弱身なり 翠峯
そとがそれ相談じやよと父折き 同
相談に頷くだけの許嫁 同
五 客

出戻りが折れて相談死がつき 萬よし
慮りあつて投手を取り圍み 吐瀉樓
相談へ一人息子の幼なすぎ 千鳥
相談に仲居を交せる事になり 大學
相談をすれば亭主は歩き出し 町二
(人) 相談をする人もなく灯を 銀笛
評 類吟中の佳

(地) 工女今父の話犬が嗅ぎ 茶撫朗
評 之も座五が生命
(天) 相談に來た兄様は急に老け 羊司
評 座五よろし

柳川洲馬選

獨特のなまりに漁師らしく見え 若人
氣の荒い漁師に猫のなつきよう 夢人
此の邊はみんな漁師と教へられ 進一郎
漁師から聞いた通る時化に遇い 茶撫郎
不景氣を漁師は舟の上で知り 吞陽
漁師けふ蟹なでしこを植えて 町二
漁師の子傘持て來てきつと降り 錦魚
暮れさいふ色にも漁師振り向き 鎌月

空模様見て漁舟のこまを切り
 漁師街掌程な畑を持ち
 漁師今日は不思議な日だまらひ上げ
 風に立つ漁師胸毛を吹かせてる
 金鐵子

いつの間と漁師の船に追ひ拔れ
 晩鐘を聞いて漁師は漕ぎ出る
 志郎

二挺櫓の漁師まじり身に浴びて
 香爐夏は漁師も近寄れず
 菅天

御自慢の投網漁師は苦笑ひ
 漁師村備前焼が動く様
 刀四郎

魚をユヲ漁師詛りが時に出る
 算盤と別な漁師の儲けやう
 將兵

塙づけが空地をふさぐ漁師村
 素足にて不足ない氣の漁師る
 源坊

雲行きを漁師と漁師同じ腹
 漁師も跳ねるまんまにまかせ
 文絲

父ちやんをのんを見ま今日の風
 裸からはだか漁師日は暮れる
 雪洞

とも綱を解いても一度沖を見る
 船底で漁れた魚の数をよみ
 助六

佳椎子

少年

○ 刀三 選

黄昏の丘を少年駈けて来る 微苦笑
 少年の口にビールの苦い味 一路

夕闇をぬつて漁師は家に入り
 大漁に漁師着更へて草臥れる
 柳秀

地曳網溜の娘は悪ひれず
 もう歸る漁師へ夕陽流れてる
 天花

ロケーションよく漁師を居る
 測候所時に漁師に侮られ
 同

憎いではないが漁師の荒く呼ぶ
 取付けの騒ぎ漁村へまで響き
 同

内海を隔て、漁夫の戀を持ち
 町へ行く漁師白縮緬の帯をしめ
 同

干潮に漁師の家が遠く見へ
 (佳)釣竿の膝から下は水に暮れ
 同

い、月夜漁村の戀は船へ来る
 曳網へ漁師の聲がみな揃ひ
 柳秀

一日を餌ばかりさして旦那釣り
 漁師町ばかりを汽車は走るなり
 秋晴

(人)漁師の子も不漁と別な事
 (人)出養生朝の漁師にすれ違ひ
 萬よし

(地)しばらくは女ばかり漁師村
 (天)かんと嗚る漁師の膚の也
 聞路

井上 刀三 共選

喜田 飯山 共選

少年は危ながらせて母に見せ 茶撫朗
 給仕には惜しいタイプの美少年 京郎
 少年の佛もない敏腕家 竹雪

動く風があり「星沼に影を落して魔が居
 さう」「酔ふふまた戀愛論かくくなり」
 (自嘲)等但し活字にして發表し始めたの
 は大正十年。

(1915) 一色 琴月

(一)一色寛次郎(二)琴月三澤岡香吉、
 寛、神池庵、梅花園、布引瀧人(四)兵庫
 縣武庫郡西郷町大石字八四番地(五)明治
 三十六年四月十日生(六)目下職業に逃げ
 られてゐる(七)「今日殺す鶏屋の鶏が刻
 を告げ」剣花坊、どちらから行つても墓へ
 突當り」夢村、淋しさをみんなまとめて里
 へ行き」路那、一寸敷え切れぬ程あるが
 限りがないから省く、總じて生活苦に直
 面した句が好き(八)桃割に結ふた下町風
 さ耳かくしさをコンデンスした女(九)「
 如何にして歩まむ狭くなる大地」其他ま
 だ(一〇)是以上の句を作る積り(一一)讀書
 (一二)有(一二)里辛、人氣取政策、先輩
 の態度(一三)大正十二年一月三日。

(1916) 藤井 椿 薫

(一)藤井七五三(二)椿薫(三)直八、薫
 流(四)大阪市港區九條通三の五六(五)
 明治三十八年二月二十四日生(六)官吏
 (七)提灯に追ひついて来て追ひ越す(八)
 眼は澄んだ賢いひらめきを持ち、眉は濃
 く額は廣い方、鼻は筋よく通り、齒は綺
 麗で手職として裁縫の巧みな方、大体に

少年の一人が減るさ丘は暮れ 無限
真中をバ、がわけてる美少年 突支坊

秀逸

繩とびの順を少年来て亂し 助六
糊かへを着た少年は鼻もかみ 同
夕立に濡れて少年母を戀ひ 金鐵子
母の手を振り切つてゐる美少年 翠峯
吐られて少年繼子かと思ひ 一路
少年が少年をよぶ前へ虹馬行

家の暗さ少年このごろ知りそ 同
少年二人入日を受けて別れたり 同
遊びほうけた少年の憂ひ顔 同
美少年泣いた女を母さ知る 同
(軸)義経をさな心に哀れがり 刀三
少年のまだ度し易き膝頭 同
少年へ金齒を見せた曲馬團 同

選後にい、句を落したのかも知れない
けれども五百餘りの句の中からこれだけ
を選びました。

「少年なる生硬な課題に拘泥しすぎてか
随分深刻なところにふれてゐながら句さ
して纏つてゐないものが澤山あつた事に
對からず考へさせられました。

飯山選

少年の自慢話を親がき、一輪
少年にきかれてはつこする病 銀笛

姉の友へ少しはにかむ年になり 微苦笑
可哀さう今日も少年繼母のため 佳雅子
先生へ紳名をつけるわんぱくさ 北山人
中學へ行きたいことを泣き云ひ 源坊
劍劇のちらしに子供同士もめ 千鳥
男の子らしく答も氣持よく 夢人
少年の裾に廣つば風があり 鎌月
少年はあぶながらせて母に見せ 茶無朗
他所行を着て友達へそつけなし 進一郎
横着な少年だよ古本屋 太路
少年さ侮りさんだこが出來 竹雪
俄雨にぬれて少年母を戀ひ 金鐵子
少年は手品の本を買つて來る 刀四郎
お土産に少年向の物を買ひ 逸紅
行届く世辭に少年老けて見ゆ 柳秀
少年のよごれたまんま夜學に來 さ、舟
無邪氣さを破るこゝに馴れ 無限
少年にしてやるこが大きい 郊村
少年はこれお粗末さ云つたきり 醉夢
少年の理想に親は貧しすぎ 志郎
二宮のことををりく親は云ひ 花蝶
少年の春をゆたかに歌ひをり 錦魚
映畫におこがれて少年上つて來 京郎
大道の香具師少年は追拂ひ 雅路
少年がアルツバカセルだのこ 吞陽
突支坊

心は沈んだ活きく、さ明るい方が良い。
(九)餘りに發表せない爲か佳句はないけ
れき二三句ある、是も後日になれば笑吟
に終る、下駄の音まだ聞わてる大晦日」
(一〇)都々逸、俳句、三絃、舞踊、俳諧
演藝(一一)なし(一二)ハイカラ美人、か
さつく者、喋べる者、酒類一切(一三)大
正十三年頃大阪日日新聞にて路郎選で活
字になつたのが始め。

(一七)安藤花蝶

(一)安藤吉治(二)春野亭花蝶(三)土口
(四)安東縣驛前通滿鐵社宅第一號の二、
(五)明治十一年六月拾五日生(六)滿鐵社
員(七)字形は合はね共信實覺證の句言が
好き(八)昔の事は頭になし、今佛の身、
靜正院誠大婦でも申す女があれば(九)
「嬉しうてたまらぬ遠足汽車に乗せ」「到
來の燒米父にまづ手向け」「(一〇)教文と
横笛、妙安流の尺八、名古屋甚句(一一)
妻あり子三人、長男は法科高文豫備合格
次男は機關高科卒業今は乗務中、長女は
五年生(一二)無心(一三)大正十四年一月
二十日頃安東の寶湯で會をせし時其時の
句に、本年も正月だけの日記帳」が柳建寺
の選に五客に入る、爾來勉強中。

▲次號から此の欄の係がかはります▼

暑中御伺

ひる寝をするひまが
 あれば句作に精進しや
 うではありませんか。
 原み臺に無駄話をする
 ひまがあれはお互は川
 柳談に花を咲かせやう
 ではありませんか。そ
 こには涼味が横せす
 にはらません。御來遊
 をお待ちしてります。

大阪市西成區千本通五丁目七番地

川柳雜誌社
 麻生路 郎

少年に早起共にさせられる 福太郎
 花も實もある少年叱られる 石竹
 少年は苦學を胸に描いて見 九柳
 少年にわからぬ愚痴も云つて 卜柳
 ある時は少年ませたことを云ひ 秋晴
 叱られて少年糞子かとおもひ 一路
 お辨當少年 同 十覗き合ひ 同
 言ひつけたまだけはする小僧 普天
 正直に少年 車掌次を云ひ 同
 交番へ少年 五錢届けて來 吐露樓
 少年に所をきけばついて來て 同
 少年の夢は冒險ばかりなり 萬よし
 少年の眼に偉大なる雜誌記者 同
 少年に父のおろかが見て來る 悟郎
 少年に其日暮しは馬鹿さ見ぬ 同
 少年のそゞろ心に石をけり 町二

少年のたゞわけもなく涙ぐみ 同
 少年の刺激の多い町住ひ 無心
 少年へ調査あまりに理屈すぎ 同
 少年の僕海軍になるに云ひ 眠聲
 少年に問へば正成いつち好き 同
 少年はあんなことから喧嘩をし 翠峰
 少年の知る由もない糞母のこご 同
 母の手を振切つてゐる美少年 同
 鍵さきを少年案じつゝ戻り 助六
 細さびの順を少年來て亂し 同
 糊かひを着た少年は鼻もかみ 同
 少年ひとり列車の人の眼をひと 馬行
 遊びほうけた少年の憂ひ顔 同
 村へ來て先づ少年を見付だし 同
 家の暗さ少年このごろ知りそと 同

川柳書架 (廿五)

久流美 永山光淋 坊編
 句集 かき松葉

▲その「巻末」の一節を轉載すると、
 「かき松葉」は名の如く見當り次第かき
 集めた自分の句集です。もよりの舊作
 新作の區別もつけず古い柳誌や北國柳
 壇のスクラップから抜きました。

大正八年七月 久流美

▲巻頭に井上劍花坊氏 窪田銀波樓氏
 の序文と編者光淋坊氏の「編纂につい
 て」が掲げられてある。本句集にあつ
 めた句数は五百有餘句である。

▲大正八年七月二十五日發行。菊半截五
 三頁。定價金參拾錢。發行所は金澤市
 石浦町八十番地北都川柳社。

句集 第二輯

▲序をそのまゝかけるこ
 かつやかし五月の陽にそむいて永
 久に父逝いた。本集は六十二年
 收獲から自分の思ふが儘に抜いた五
 句ある。第一輯と比較して、いさ
 ども進歩の跡が鮮えねばならぬが、そ
 れは大きな疑問である。只よく、私
 して今日の川柳人たせしめた。そ
 克く今朝の川柳を持つて居られた。そ
 父の墓前に理解をかなるこの一冊を
 けんとして、急遽編んだのである。

昭和二年六月 遠藤砂の家

甲斐・鉢澤



川柳の松江 (一)

麻生路郎

七月九日の夜、二柳子、萬よし、かほる、路郎の一行四人は、大社行の夜行で立つた。こんなには大勢連れで川柳行脚を試みるのは始めてである。萬よし老なごは、まるで小學校の運動會さといふ騒ぎ方である。汽車が驛へつく度に、窓から首を出して何か買つてゐるのが、萬よし老で「どうですお茶」「どうですビール」さ次から次へ配當をしてくれる。義理にでもそれを吞まなければならぬ。そのうちに少しく落ちつきが出来て来た。

途中で「電報をうつておこう」といふことになつた。「頼信紙が

あるかしら」云へば「持つてゐます」さ二柳子が早速頼信紙を出す。いつでもこれだけの用意があるんだから二柳子が生きてゐる間は川柳雑誌は大船に、いや行脚の



世界的文豪ヘルン先生

が「切手があります」といふ。萬事この調子である。萬よし老早速そのあとを引きうけて次の箱へ車掌をみつげに立つて行つたが、すぐに引き返へして来た。そして「エライことをしたアツハハ……」と例によつて元氣な聲を張りあげる。エライことにしては調子がよすぎると思つてゐるさ頼信紙に貼つた散の切手がめくられて風のために散つてしまつたのだつた。生憎それが次の箱さの間で瞬間的の出来事なのでござることも出来ない。萬よし老らしい失敗さして一同祝盃をあげる。即ちなんさか云つては呑みたいのである。尤も萬よし老が一番に呑んでゐたやうだ。汽車は用捨なく走つてゐた。山又山を抜けて走つてゐた。時々空から煙が舞ひ込んで来てトンネルであることを知らした。山間の畑では水がなくて植つけが遅

れてゐるさころもあつた。二柳子は時間表を首びきをためて何くれさなく事を運ばせよるため考に就つてゐた。萬よし老かほるの兩人、この暑いのに首をあつめてしきりに何か談しこんでゐる。耳を澄ましてよく聞けば「兄さん、そりや無理ぢやないな」さかほるが大阪調を帯びた女性的な聲を出してゐる。「してくその大盡にはそれでは敵を討たうなどささいふ氣は塞頭無のぢやな」さ萬よしが淨瑠璃仕込みのだみ聲で應酬をやつてゐる。少しくおこなしくなつたと思へばこの調子である。二人は松江で一興行うたなければおさまるまい。

白日句稿

麻生路郎

不景氣がさせたきみじかとも思ひ
死ぬ氣で出たに松竹に居る
紙屑をまるめてすてるに等しき

鳴尾

苺摘もろたばかりの嫁もゐる

岸の里

引越して變つた雲の出るところ
エプロンをかけるご手紙ばかりかき

松江の宿にて

和田見通ひ明るく聞いただけのこと

へルン先生の舊居を訪ふ(三句)

根岸邸刻みをのんだこともきき
蓮池へ今でも藏のかげがさし

先生の在りし日を懐ふ(二句)

蓮の葉が揺れるごこから妻をよび
こゝに斯う坐つて梅を數へて見

松江市に贈られし先生の遺言

この椅子がこの机がご市長云ひ
濁水再び妻を迎へるときき(二句)

このごろの下駄のかるさを思ひゐる
後添が来て明けたてを軽くする



川柳靴盗難の記

大島 濤 明

何がつまらぬさいつて、盗難に逢つた程馬鹿らしいものはない。同じ失ふものでも遺失、損失などは己れの直接の失態からでいくらか諦めもつくが、盗難ばかりはさつ考へてもいまいくしい。

それは私が薩摩町の居住當時のこまだつた。そのうちはかなり大きい住まひだつたが物置が別棟になつてゐて背戸の屋敷内に建てられてゐた。書棚が満員になり、古書籍や雑誌の置き場が殆どなくなつたので當分用のなさそうな書籍や雑誌

は物置に運んで置いた、そのうち川柳の雑誌は私が「娘ミ廟」發行當時以來各地から寄贈されたものを、毎號種類別に綴つてゐた。之れ丈は將來川柳句集を編纂したり或は、川柳變遷史の資料にしやうと思つて一等大切に思つてゐたので、古い支那靴に詰め込んで物置の棚に上げて置いた。

大正十四年四月二十七日、朝早く起きた妻が、「アツ昨夜泥棒が這入りましたよ」云々頓狂な聲を立てたので、寢坊の僕もすぐ起きて見た。

「何を盗られたんだ」
「いむ物置のものです」
「いふ」何んだ物置の出来事か」三氣拔けがした様だつたが、兎に角物置のうちを極めて見たが大した物も滅つてゐないだんく調べて見るに例の支那靴が見當らない。

「アツ靴をやられた！」
私はその瞬間に突き飛ばされた様な緊張味を覺ゆるに同時に、川柳雑誌一杯を失

つたこも残念でならなかつた。犯人は當地方名物の小盗兒（支那人の狐鼠泥）の仕業である、「小盗兒は何の爲に川柳雑誌を盗んだのでせう」「何あいつらは靴が重いので小判でも一杯詰つてゐる位に思つたらうよ」
しかしあまり馬鹿々々しい、盗んだ彼が靴を開けて失望する様なさ思ふに、フツとお笑しさが湧いて来る、それでも惜しくてならん様な氣がした。

全く私には惜しかつた。その後川柳雑誌を手にする度にあの小盗兒が憎くてならない、その中には、大正川柳、忍路きやり、楊柳、多寶塔、番傘、擬寶珠、はこやなぎ、八幡船、鷄林、百萬石、賊鉢、ホコリ、一輪車、など大正八年以後の發行のものは大抵集めてゐたのだつた。大連には露天市場さいふがある、一名小盗兒市場さいつて、下級支那人の衣裝寢具、帽子靴、なまの日用品市場で、そのうちには飲食店、散髪屋、戲場さつては私娼までがある、この一部に古物市場が

ある、日本人の家庭やそここからこそ盗んで来た、靴だの、草履だの、洗面器だのをこゝで買取つては安く賣るのである。

露天市場の成り立ちには國際的な意味が含まれてある、清朝倒壊の際、顯族肅親王はこの關東州へ亡命した、日本政府では關東都督府をして親王を保護せしめてゐたが、何年経つても復辟は成りたない。日本の保護もそうそうは出来ず、王家の資産も無盡藏ではなかつた。家寶を賣り、家具を拂ひして大家族の糊口を養つてゐたが次第に心細くなつて来る。日本政府では放つて置くわけにも行かず遂に數千坪の土地を貸下けこゝに露天市場を建設せしめ、之れが經營によつて得る利益を以て王家の經營に當ししめた。斯くて露天市場が生まれた。

川柳靴の盜難後私はこゝに川柳雜誌がひよつと賣られて來てはゐるまいかと思ひて見たが、さんみ分らなかつた川柳雜誌の盜難はほんごに馬鹿々々しくも惜くて

ならない。

劍花坊氏の句(日記)

安川久流美

大正になつたら「大正川柳」が生まれ、昭和になつたら「昭和川柳」が産聲をあけた。何たる非藝術的な題名であらう。しかもそれが中央柳壇の骨子柳人組織が命名するのだから尚更可笑しかつた。幸ひにして元「大正川柳」の主宰たる劍花坊氏だけは改元と共に古き名を捨てた。そして同氏は不斷の努力で新進作家の養成に努め、句の革進に邁進してゐる。だがお上手の無い所、劍花坊氏の句には柳味深き佳句に乏しいのはさうしたものかそれは理りである。如何に金ミひまがある柳人ミ雖も、句作に、批評に、研究に普及に、講演にミ、いふトシ、拍子で斯道の中心に立つわけには至難である。一方から種々な攻撃をうけても、之に耳を藉さず、現代川柳の呼吸を知つて突進する所に同氏のけなけさはある。

同氏最近の句(川柳人一七七號所載)「イミ手がその引き金を引きました」この句を一讀した時、私は如何に劍花坊氏の革新川柳に眼ざめ、且つ句の内容に力を籠めてゐるかを推賞したのです無論短銃を句にしたもので單調三片付ければそれ迄ではあるが、その作句の思想には現代の利那を諷してあり、而して現代人の頭腦の淺薄さを嘲笑してゐる。この十七字が現在の吾々の十七字なのである。技巧をはなれて下五「引きました」はこの句にのみこの際の用語である。徒らに之を模倣をしては句が死んでしまふのである。

劍花坊氏從來の句は悉く「技巧」の二字に盡きしめた。それを斯くまで現代川柳の進展に微細の注意を以て、見つめたる社會縮圖にペンを握られるこゝを嬉しく思ふ。(七月四日)

山峽の伯父へ

萬よ 生

七月三日附の御手紙拜見養蠶も終つたそ

うですね。二日の晩からの雨で植付けも濟むそですね。四人の孫も息災なそですね。桑畑の手入れて軒下を流れてる損保川の鮎を取る隙もないそですね。冬中雪に埋つてた水電の發電所の水が細くなつたそですね。近詠「詠我家」
 家在黄揚落照邊、前臨流水後桑田
 休笑禽舎一茅屋、山雨溪風五十年
 の詩は伯父さんの言はれる通り平仄がうまく合はないか知りませんが、文字通りの山高水明の御住居に兒孫の爲めに營々ご職の柄を握つて居られる姿が偲ばれます。十年前御訪ねしました時は、二月の末で川邊にても三尺は積んでましたね。鶏鍋をつつき乍ら大雅堂で山陽を見せて頂いて、書書の講釋を承はりました。講の話は忘れましたが「山陽の詩書は山陽の魂を紙にぶつ付けたものだ」さういふ御意見を覺わてゐます。
 「川柳雜誌面白く拜讀致し候、貴兄中々ウマク敬服いたし申候、嗚々お樂みの程御結構に存上申候」なき穴へ這りた

いこです。甘い處の騒ぎではありませ
 ん。駄句を矢鱈につつて印刷になるこ愛憎の盡きるこばかりです。併し少くとも造花でない命のあるものを造りたい熱は持つてゐます。
 伯父さん、私だつてべんぐいの稽古三味に晝寝も出来ない、磯節の散財で夜の眼も寝られぬ廓に住むより「休笑禽舎一茅屋」の方が羨ましひこです、店番をしてゐるこ、ひつ切りない自動車の騒音で神經衰弱になりさうだし、すかしても怒つても棒にも箸にもかくらぬ酔ぎれに相手になつたり、殊に年増女郎の管なきは、うんざりしますよ。昔はお天道さんご米の飯は人間についてたんだ」そうですが、今時じや生活難は人間に付きもんですからね。
 伯父さん負け惜みではありませんが、私はこの生活にそう大して不平は持つてゐません「小隠は山に隠れ大隠は市に隠る」なき大層氣取るのではありませんが、哲學も宗教も文學も川柳も、人間の中に生れ人間の間に育たなければ、生命が溢れ

心臓が活躍し、觸れるご靈感を生じ、切るこ鮮血迸るものは出来ません、川柳に精進する靈場としては、天下の名刹ではありませんが、居心地が悪い堂ではありません。道は近きであり、活眼のないのが残念です。伯父さんも「壯健否な老健之方に候へごも何分夕陽の年齒たるを以て萬事大閉口に御座候、御憫察可被下候」老健全極重疊です。一度八月大名の盆過ぎにでもお伺ひして、二十ヶ年の警察生活のお話でも承はりたいと思ふてゐます。(七、五稿)

太陽を驅使せよ

三好華郎

リンドバーク氏が大西洋を横断した。北極を飛行船で突破したノビレ少將がチナを連れて来る。アムンゼン氏が來朝して講演した。こんな事が一年前の我々が夢にも豫想する事が出来であらうか。川柳も矢張りリンドバークさなりノビレさなり、アムンゼンならねばならぬ時代が來て居る。日本のやうな小さな天地

のこまばかりを句にして居る時代ではない。視野をもつて廣くして、北極洋に白熊を遊ばせ、赤道直下に大鯨に鹽を吹かせるやうな句がもう生れ出てもし、僕が七月號に發表した、『時々は我れ太陽を蹴飛ばさん』といふ句はこの意氣で作つた句である。

損だまか得だまか、義理がごうの、人情がごうのと言ふやうな小つほげなことにこだわつて居ては駄目だ、我々の夢はヒマラヤ山脈の土で太平洋を埋めることも出来る。コンロン山脈を自動車でドライブすることも許される。川柳が單なる皮肉や、生活の描寫で能事終れりとする時代はもう去つた。

物質云ふものは限りがある、フォードが世界一の金持だ云ふが、その全財産はたつた四十億圓ではないか、日本の金持で、世界で十三番目の金持云はれる三井の總資産は三億圓ではないか、その位の金がないだ。獨逸が疲弊の極に達した時には一磅の英貨が二兆馬克にな

つた、さうするに、今に一圓が四十億弗にならんとも限らない、日本が貧乏で日本人が貧乏人だから云つて悲觀する必要はない。アイヌのやうな種族はそんなに保護しても人口がだんく減つて行くそれに毎年百萬人も人口が殖ゆる大和民族は將來があるんだ生活難ぐるにへこたれるやうな奴は絞め殺して了つた方がいい。此頃の川柳を見るに、ぎの川柳も此の川柳も悲觀的なものばかりである。こんなことでは將來が思ひやられる、泣き事を列べたつて誰も金を呉れない。それなら不景氣なことを言つてしめつぽい空氣を世の中に傳播するよりはヤセ我慢でも何でもい、景氣のよい川柳を作つて蒼い顔をして青息吐息で苦味丁幾を吞まされたやうな、こまばかり言つて居る奴に活を入れてやる必要がある。

今は八月だ太陽の黒點が活動して俺の顔を黒ん坊のやうにする、健康そのものゝ如き色にしてくれる。此の太陽を驅使して動力化し、雷をつかまへて電燈をつ

けさせ、電を利用してラヂオを聞き、電車を走らせるやうにする位の氣位だけは持たたい、川柳の世界を太陽からウキネットクの管星まで擴大したらさうであらう想像するだけでも愉快ではないか。

大峰山其他

——三笑さんへ——

竹馬居 主人

大峰の杓子を頂いて悦びでます。あの焼印が面白い。此頃夕食中に妻へ古句談を一つ宛する事にして、兎も角續けてゐる。其内ノートに留めて置いて呉れたその二三を抜いて、御膝下に贈ることにする、やはり食後の一話にでもして頂きたい。大峰に關係ある古川柳大峰のはなし山伏ほらをふき法螺貝は吉野の町をねせぬなり前者は修験者の吹く法ら貝にかけた狂句順の峰入知る人は花ばかり逆の峰入いが栗がしんがりし俱に好い句ではない。熊野より入るを順吉野より入るを逆、前後鬼山にわから、四月峰入りをなす云ふ。

花の雪役の行者は高足駄
夜ざくらは役の行者の知らぬ道

役行者在當山祈欲見正身薩埵、於是現釋迦像、行者曰不可也、現彌勒像、行者曰不可也、次現藏王忿怒相、行者曰可也、以爲我邦能化、即今尊像是矣なごある、大日本史に詳である。

大峰は杖高野では水の世話
此の句は難解であつたが、餘り深く考へ過ぎた結果で「高野の水」は、

毒と云ふ名は靈山の玉に疵
此の水をのむなさいふが玉に疵
で、高野山の弘法大師の像は、此の毒水を吞ませぬ爲めに、水指のようなものを持つて居らるゝと聞く、大峰の御本尊役の行者は、一本齒の下駄に杖をついて居る、水や杖の世話までする所が人間以上の慈悲云ふわけ報告式の句は故事を探らねばならぬので兎角時間を要する。

七月號拙話で遊女指切の大意は盡した
天明九年の「寶の梅」に
「息子遣過し座敷牢へ入れおきしに吉原からの文、親仁の手に入りひらき見れば随分細字に紙の入りぬやうに短くしたた

め、物の入らぬ小指を切り、蛤貝に入れ送りしを、親仁感心して息子が前に持行きこれ見をらう世間ではこのやうに商賣に身にしみる」
蛤貝かきは小咄の見つけ所である古句は苦肉の計略香箱に小指なり
嬉しさ怖さ血だらけの文に錫
皆女から與ふる物で有か文政版咄實に久しくなじみける女郎のしうちあしき事つて、容は腹を立て、おれがいつぞや切つてやつた小指をかへせ、もう再ひうぬが所へは來ぬさいへば、女郎も同じく腹を立てそんならもう來なんすなご、苦笑ながらづつ立つて箆筒から大きな紙袋を取出し、此内このうちでぬしぬしのを見分わきまなし

本朝俗諺志に千葉笑ちやば云ふ事がある
下總國千葉郡千葉寺にて、毎年十二月晦日の夜諸人あつまり、面をかきし頭を包み聲をかへて、所の奉行頭人庄屋年寄、依估いご最良さいりやうを書いて大きに笑ひ褒貶ほうてんせり、諸役人此笑ひに逢はじあは常に謹つつしむ也、又行跡あしき人親主人不孝不忠の輩、此笑

に逢つて自今を謹つつしむ、自然のよき教訓也
「ご、古川柳に
千葉寺の春は梢が皆笑ひ
自分も關係して居る、柳樽拾遺輪講の中に、「舌うちでふる舞水の禮はすみ」は大體解釋済なのであるが、五月雨草紙に「郡下三伏の炎暑冷水を汲みて茶碗を添へ置き往來の人に勝手に飲ましむる」振舞水ふるま名付るが、是は古絶ふるた無き所なりしが、余が家始めて之を爲して然る後、今は所々にて做らふ事ことなれり。其故は余が家三番町通市ヶ谷見附内の小隅に住みて、三方屋敷なれば其西に當れる通りは、即ち見附の往還わんわんなりしが、塀内に大樺樹あり、其枝差出て往來を覆ひて極めて清凉なる上に見附より入り來る者も、九段阪を上りて來る者外ほかに憩やすふ可べき所無なきにより、必ず余が屋敷外ほかに止りて樺樹の陰かげに憩やすひたり。又邸中に極清冷なる井水あれば汲取りて、桶かの儘水まま酌しやく茶碗を添へ出し置おければ、往來大に喜よろこび毎年車夫興丁くるまの類、炎天えんてんに坂道を上り來る者は之を樂たのみに來る事ことなれりさいふ

平塚の一夜

檜山千代二

湘南の地、平塚町に駒人を訪れるべく旅装をこゝのへ十六日夕べ東京驛に柳路を落ち合つた。用意周到な柳路は發車間際にも白靴を磨かすことを忘れなかつた。横濱をすぐらころから東西柳路の批判はいよゝ佳境に入り柳路の舌鋒當るべからずであつた。むしかへすやうな車中の酷暑にもひるまず市電で友を訪れるやうな気軽さで七時すぎに駒人に迎はられて平塚の地を踏んだ。

一別以來の事さて一入懐かしく驛を左にこの町の代表的灯の街の三味の音をきゝながら駒人居に案内された。平塚町の繁榮さは二人を赤毛布にしまつた近々市になるさうであるが、駒人の店は地の利を得てゐる。彼の川柳の甘味と相俟つて商賣の秘術さが必々二人の胸に來る。共に一方ではお母さんの一ト方ならぬ辛勞。弟君の努力の結晶が如實に

新店に現はれてゐるのが嬉しかつた駒人兄弟の手になつた餅菓子を賞味してから四五丁離れたお母さんの別宅に導かれた二人も初對面ではあつたが慈母のやうにもてなされた。無遠慮な裸にお母さんのお手料理をいたゞきながら久し振りに三人で句作に耽つた。

柳路、千代二を迎へて

ホームから三人になり懐しく
よく寝てる友へ母親氣兼ねる
なにくれさなく女親水を汲み
父兄會へ行くのに妻の薄化粧
大喧嘩弱い巡査を見て歸り
同 柳路

十八夜の月が玄關の疊へ硝子越しに流れてゐるのに、をうごかさされ、浴衣がけの三人はやがて平塚の海岸へ歩みを連んだ。磯の香が高くなるにつれて月見草が今を盛りのモダンガールのやうに咲き亂れてゐた。海原は湿しない現在の思想界のやうにほの暗かつたが銀波はその福音をかもすかのやうにきらめく美しきに恍惚させられた。腕時計は既に十一時をすぎ

てゐた。歸途は灯の町の張店にそゝられたが一時近くに家に歸つた。そして新店のために送つていただいた路郎師や刀三松雨、万よしその他の諸兄の短冊を拜見しながら再び句した。

五六丁先が海邊の月見草 柳路
明日歸る友が月見草折てる 駒人
ハンカチに包む月見草しほれ 千代二

翌日の午後は三人で大磯に遊んだ。水泳なるに柳路も駒人も、から駄目で一人前の海水着を着てゐるのが滑稽な位であつた。海水浴場としての不完備さは天に名高い大磯としてはお話にならないが右手に伊豆半島の一脈の流れ、富士の超然たる風をもなつかしく、彼方には江の島が浮み出てる湘南の地の自然美には心を奪はれない譯にはいかない。焼ひつく砂に腹這つて柳友の寄せ書を送つた再び平塚にひきあげ、駒人のお母さんの御歡待に名残りを惜しみながら夜の九時十二分の列車に身を横へた。



各地柳壇

川柳 七月例會

二日夜 端の坊

當夜の出席者左の如し

路郎、水府、百雷、久郎、彩秋、醉夢、佳山、芳松、孫一、幸泉、春、憲翠、柳々、九柳、千沙、萩鷹、塊人、突支坊、義矢滿、鮎美、義治、かはる、舟々、翠峯、流星、源坊、松壽、蝶二、三笑、二南、仙秋、飯山、閑路、萬よし、私(二柳子報)

水泳 兼題 路郎選

競泳の映畫に選手物足らず 燕柳
水泳に母の注意も有難し 萩鷹
水泳のかにな片手に歸つて來 源坊
泳いでたのを組の子は見た云ひ 柳子
飛込みのうも浮てくる泡沫をみせ 醉夢
水泳の顔え海月がつきあたり 佳山
あの湖で泳ぐと極めた登山隊 百雷
水泳の型を番臺叱りつけ 春三
見られてる意識飛込み續くなり

朝の海淡路島まで泳げそう
坂妻が抜手を切れば手をたゞき
少年の頃を思ふ
悟郎 凡平

今日もまた觀海流で腹がへり

自信ある首がはるかの沖に見ゆ
水泳の選手に惜しいいゝ娘
水泳の落伍のそゝ背が高し
愛人のために抜手を切つてゐる
須磨明石妻泳ぐこは知らざりき
水泳の戻り夕立にあつて來る
腰までのさで泳ぐに浮袋
この邊でもう背が立つと思ひきや
水泳に性來家の子は弱く
愛人へ泳ぎつぶりも見せておき
泳ぎついて向ふ岸なる砂をふみ
夜の川二人で泳ぐらしい聲
(軸)一週忌その弟を泳がさす
萬よし 二柳子
水府 三笑
義矢滿 水府
翠峯 水府
彩秋 水府
塊人 水府

白靴の歩調が合ふて竹生鳥
給仕ももう白靴欲しい年になり
カフエーの夜を白靴の動くこも
眺へた白靴雨が續くなり
歸省した娘の靴の白い事
白靴で來た砂濱の疲れやう
冒險のやうに白靴穿いて掛ける
塗り立ての白靴膝を曲げて掛ける
白靴へ女房の手際事のまゝ
二人さも白靴で出るピュゲンク
白靴に都大路の堀返し
白靴をはげさ今年も梅雨があけ
髭を剃る縁に白靴乾ききり
白靴を床屋向ひの軒へ干し
互客
白靴と同じ歩調の女學生
はちきれるやうに白靴はいて出る
白靴でかきもち一つ踏んで飲み
白靴が目立つ故郷の驛へ降り
白靴のカクテル黨と見られて居
(人)二階から降りて白靴置き替へる
(地)あした履く様に白靴塗りすぎ
(天)白靴のすこし小さい夏がすぎ
互
假橋の眞下のごかな唄になり
假橋で邪覽になつても見て居たし
假橋の下ゴタ／＼と船が着き
假橋があつたさ見ぬ渡り初め
假橋で別れ道にする藝者にて
目かくしの裏で假橋音を立て
假橋が出来てバツトは賣れ溢り
萩鷹 柳山 春三 佳山 久郎 憲翠 源坊

かほる 秋沙 舟々 失名 義矢滿 春三 萬よし 久郎 憲翠 塊人 蝶二 同 同 久郎 鮎山 飯舟 路郎 蝶二 佳山 百雷 選 萩鷹 柳山 春三 佳山 久郎 憲翠 源坊

路郎先生 歡迎川柳大會

外三氏 歡迎川柳大會
松江支部幹事 奈其井仙坊報

來訪

本誌主幹麻生路郎先生は本社同人、橋本二柳子、庄萬よし、高橋かほるの三氏を同伴して最近朝に隆盛を來たした。松江柳界を訪問すべく、七月十日午前八時三十八分、松江驛に到着されました。

兼て二柳子氏と手紙で打合はせてあつたやうに私(仙坊)は「川柳雜誌」七月號をブラツトフオームに立つて打振りました。車中からも挨拶がありました。停車したので車窓にかけ寄つて初對面の辭を胸をさざろかせながら交はしました。出迎はたのは穂波と清宵と私の三人でした。先生等御一行は直ちに下車されず、そのまゝ、大社參拜の途に向はれました。大社では高松村の新人尾添雷相氏の出迎ひがあり色々御世話をして下さつたこの事を承まわつて、私等支部一同は氏に對して深く感謝して居ります。

一行は雨の爲に豫定よりも三時間早く松江驛に歸つて來られました。同驛では不二綱穂波、仙坊等が出迎は京店なるなにわ館へ案内致しました。同館樓上から夫道湖の美を激賞されたので、私等水郷の人々は嬉しく思ひました。同夜は天神の「みどり」で開かれる歡迎川柳大會に臨まれる事になつてゐました。

句會

不二綱氏と私で會場へ案内をするこゝに

なりましたが、多少時間に餘裕があるので、夜の松江を見物してから、徒歩で會場に向ひました。

連日の雨が全く晴れ渡り、この意義あるつごひを祝福するかの如くに、星が無數にキラ／＼と輝ひてゐました。市内は勿論のこと市外からも數氏來會せられ、左記三十餘名の出席を見頗る盛會でした。

長二綱、華雪、咲明、舟帆、穂波、春花、町二、三雷波、一三六、無鐵砲、紅陽、清宵、舞姫馳砂詩朗、映紫明、亂蝶子、孤呂一、粹浪人、天痴人、柳山、星路、赤ん坊、一夢、仙坊、外數氏(來會者名簿より)

路郎先生等の着席があつて、同時に席題を發表いたしました。一同句三味に入り十時に句作を一切り記念の爲撮影をいたしました。お互に晴れやかな顔をカメラにおさめ、それより萬よし氏の選句發表がありました。續いて不二綱氏は立たれて歡迎の辭を述べ、路郎先生の主義及び川柳雜誌社が極力努力しつゝある川柳の社會化と初心者指導に就いて詳しく説明をなし、終つて路郎先生を紹介いたしました。路郎先生は極めてうちさけたる態度で初對面の辭を述べられ、先づ松江の柳界には若い川柳家の多いことを讚美され、現下柳界の傾向、川柳雜誌の使命、川柳の向上、選句態度等に付いて親切に詳述され、我等後進を導くにうまれるところがなかつた。講演が終つてから兼題「花道」の選句を發表せられ、こゝに句會の幕を開ち、次いで歡迎宴に移りました。

歡迎宴會

歡迎宴は路郎先生の崇拜者のみにより同園で催しました。夫道湖から吹く涼風を身に浴び隔なき座談に花を咲かしました。次いで川柳を初めた動機を白己紹介し、雅號の由來に、心行くまで柳味に浸り夜の更くるに連れて各自一藝にうち興じました。月光は私等に無上の快樂を惠んでくれました。興の赴くままに歡迎者側から揮毫を乞ひしに、先生は心好く引受けました。銀短冊上に墨の跡墨々さされました。散會してのから旅館まで見送りなりましたが、時正に午前四時で東の空が薄々白くなつてゐました。句稿は左記の通りです。

席題「飛石」

萬よし氏選 (仙坊記)

- 飛石を庭師いつものやうにほめ 舞姫馳
- 打水に飛石一つ濡れのこり 天痴人
- 飛石に撒いて打水やめにする 春花
- 飛石の上で手紙を出して見る 紅陽
- 飛石(素足のまゝ)は盤なり 一三六
- 飛石のまだ奥がある様に 見ゆ 一夢
- 技振りへ飛石一つ動かされ 天痴人
- お茶一つ呑み飛石の位置をほめ 同
- 飛石にしやがみ萬年青に興味を 三雷波
- 飛石に立つて植木屋呼にやり 舟帆
- 思案もうつきて飛石傳ふて出 喋 朝
- 貰ひ風呂の世辭飛石にけつまつき 町二
- 飛石の露ペンボリの灯に光り 亂蝶子
- 飛石を一つ渡つて 緋鯉見る 華雪
- 飛石を植木屋無造作に歩き 星路

飛石を踏んでトンボへ手を延ばし
藤椅子にもたれて飛石敷えたり
飛石へ片足かけて月をみる
飛石を跨いで笑ふ父無し子
飛石の椽から溶ける霜柱
飛石のその又次ぎの人もこけ

路耶
二柳子
星路
喋朗
赤ン坊
路耶

佳作

飛石の廣い庭をば縫ふて居る
飛石をのけるこ蟻の亂れ様
飛石のウツカリ踏めば焼けてゐる
飛石をきれいはいてまりをつき
飛石のこけついたのこつかぬのこ
飛石のこまで落す梨の皮

柳山
不二綱
穂波
弧呂一
かほる
路耶

軸吟

飛石の欠伸に風もなし
萬よし
席題「玩具」
青砥不二綱選

舟帆
一三六
喋朗
映紫朗
かほる

守をする方が玩具をこわすなり
玩具屋の店から子供うれしく出
子の足に脆さが知れたセルロイド
呼びに来て玩具散らした儘で出る
玩具屋の風鈴次から次へなり
父さんのせんすがあつた玩具箱
玩具屋を出てセルロイドモウこ
一人子のごんな玩具も淋しくて
玩具屋へ来るさ仲々きまらない
玩具屋のヨット金魚をついてる
モウ馴れた玩具中々泣きやまず

同
かほる
星路
路耶
赤ン坊
一夢
春花

七客

新世帯玩具の様な鍋と釜
小兒科は玩具の一つ持せて見
初孫へまだわからない玩具買ひ

砂詩朗
映紫朗
華雪

玩具箱涙ながらに棺に入れ
バスケットまず玩具を出してやり
乳母車すでに人形の首がこれ
何も知らぬ頃玩具を買つてやつた
玩具買ふ事も嬉しい父さなり

亂蝶子
同
喋朗
舟帆
天痴人

地位

自慢する様に玩具の箱を出し
玩具だけ貰つて子供抱かれない
兼題「花道」
麻生路耶先生選

三雷波

天位

花道でふざけた鬚のゆらぎやう
花道の長さへ走る女形
花道をドロドロ踏んで御用
花道から花魁ソツと振り返り
雨さ云ふ氣か花道で傘をさし
花道で思案がついて静かなり
花道へ子役の足のいぢらしさ
大見榮を見れば花道や、きしみ
花道へよつばご遣ひ聲を掛け
花道の敵一筋道へ逃げ
連れて来た孫花道なかけ廻り
花道で馬懸命な汗を出し
踏み外しそうて花道よく踊り
石ある如くこけた花道
花道をモウ遣入つたに伸び上り
花道に掛る無心を呼び返し
花道の間際へよるさしわが見ぬ

赤ン坊

佳作

清管
同
天痴人
映紫朗
三雷波
雷相
穂波
喋朗
同
星路

易者

あいすまぬやうに易者は念を押し
天眼鏡シロリ窪んだ眼で見つめ
易者よく晝寝の上を蟬が鳴き
篋竹に惱みよせて易者食ひ
易者から見れば何んでもない惱み
親なれば易者へまでも来て尋ね
易者たゞ祈るかまへて篋を取る
暫くは氣にかゝつてる易の事
今日の祭りに易者一人ひま
世辭を云ふ事も易者は心得て
大衆へ易者叫んで見たいなり

同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

易者

食堂でモゲン一本喫つてゐる
雑談が落ちて食堂皆んな立ち
上役が立つて食堂打ちさける
卓上の花へ食堂灯が光る
食堂を出て屋上の風へ向き

同
同
同
同
同

易者

食堂でモゲン一本喫つてゐる
雑談が落ちて食堂皆んな立ち
上役が立つて食堂打ちさける
卓上の花へ食堂灯が光る
食堂を出て屋上の風へ向き

同
同
同
同
同

易者

食堂でモゲン一本喫つてゐる
雑談が落ちて食堂皆んな立ち
上役が立つて食堂打ちさける
卓上の花へ食堂灯が光る
食堂を出て屋上の風へ向き

同
同
同
同
同

易者

食堂でモゲン一本喫つてゐる
雑談が落ちて食堂皆んな立ち
上役が立つて食堂打ちさける
卓上の花へ食堂灯が光る
食堂を出て屋上の風へ向き

同
同
同
同
同

易者

食堂でモゲン一本喫つてゐる
雑談が落ちて食堂皆んな立ち
上役が立つて食堂打ちさける
卓上の花へ食堂灯が光る
食堂を出て屋上の風へ向き

同
同
同
同
同

易者

食堂でモゲン一本喫つてゐる
雑談が落ちて食堂皆んな立ち
上役が立つて食堂打ちさける
卓上の花へ食堂灯が光る
食堂を出て屋上の風へ向き

同
同
同
同
同

易者

食堂でモゲン一本喫つてゐる
雑談が落ちて食堂皆んな立ち
上役が立つて食堂打ちさける
卓上の花へ食堂灯が光る
食堂を出て屋上の風へ向き

同
同
同
同
同

易者

食堂でモゲン一本喫つてゐる
雑談が落ちて食堂皆んな立ち
上役が立つて食堂打ちさける
卓上の花へ食堂灯が光る
食堂を出て屋上の風へ向き

同
同
同
同
同

易者

食堂でモゲン一本喫つてゐる
雑談が落ちて食堂皆んな立ち
上役が立つて食堂打ちさける
卓上の花へ食堂灯が光る
食堂を出て屋上の風へ向き

同
同
同
同
同

川柳社
仁川句會 (仁川)

六月二十八日

矢田右大臣報

台水
牛頭子
柳葉子
紅短冊

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

同
同
同
同

食堂に令嬢丈けは和服なり
談笑に驕を越へてる食堂車
牛頭子 紅短冊

料理場を簡易食堂覗かれる
白靴 紅短冊選
臺水

白靴の包み三越から歸へり
打水の町を白靴泳いで來
同 化堂

白靴の一人が目立つ時季はづれ
白靴が一人だん白月曜日
春那 柳葉子

撒水を千鳥に歩く白靴
涼さをその白靴に見せて來
同 右大臣

白靴の朝みなもの、輝いて
白靴にして満員車を見捨て
同 同

白靴の二人へ街路樹は青じ
同 同

白靴を鳴らして通る夏の街
紅短冊 右大臣選

町内で行く見學の賑かさ
寄附の事其町内の富が知れ
柳葉子 臺水

町内の寄りに見知らぬ顔があり
隠居してまでも町内思ひなり
紅短冊 同

町内は出さぬ大家を當てに
町内マナト意氣合はぬ官舎町
牛頭子 化堂

町内で櫻へつゞく灯をつける
同 右大臣

川柳 松江句會

雜詩社 六月二十二日夜

幹事 奈良井仙坊報

兼題「小波」 青砥不二網選
佳作

小波が舟邊へあだる音を聞き
小波が立つてキラ／＼光る水
無姫馳 同

小波の中に金魚の息を吹き
遠泳の肩を小波軽く打ち
仙坊 映紫朗

小波にまかして沖へ／＼出る
小波にボツカリ浮いた柳の葉
同 砂詩朗

兼題「船虫」 青砥不二網選
十客

足音に船虫皆んな穴に入り
船虫の入つた穴を覗いて見
無姫馳 同

逃げ場所を失ひ船虫へ落ち
船虫の穴から／＼を這ひ歩き
同 映紫朗

釣場所へ船虫馴れた様により
船虫は魚籠にくつき町へ出る
同 穂波

船虫のうっかり波に誘はれる
屋形船船虫が出てゆれる事
同 同

寄せて来た波に船虫逃げ損じ
船虫の今日は穴からのぞいて
同 仙坊

(人)ぬいでる服へ船虫這てゐる
(地)船虫を追ハハンカチの強打ち
砂詩朗 映紫朗

(天)石垣の穴に船虫ヒゲを出し
(軸)船虫の入つた穴をのぞいて見
不二網 同

海水着船虫が来て目を覺し
席題「原因」 中村星路選

原因をたゞして見れば金の事
原因の知れぬ病氣で別荘地
第二浪人 不二網

原因をフンと巡査きいてゐる
原因をきかれ大きくないてゐる
穂波 不二網

(人)原因は何んだか女死んでゐる
(地)原因を知つてる妻は舌を切り
砂詩朗 不二網

(天)原因をきけげ頭を下げるだけ
席題「昨日」 互

昨日まで派手に暮した愚痴を云ひ
昨日から見ればよつぽ腕の冴へ
銀星 變牛

遠足の昨日を語る友が來る
榮轉の昨日に變る世辭をのべ
映紫朗 同

火事跡は昨日のまゝで雨にぬれ
昨日から一人の火事を恐はがらせ
清宵 同

昨日から一人前の人になり
昨日来た丁稚皆んなの影にある
仙坊 同

番狂ひ昨日買収したらこしい
昨日まで元氣でした涙聲
不二網 同

昨日より少こしいよき水枕
席題「涼み壺」 互

涼み壺一人になつて唄が出る
涼み壺扇を置いたまゝで取
變牛 砂詩朗

涼み壺遠くの唄へ調子取り
涼み壺遠く子に輪を作り
銀星 里聲

涼んでる父へ寝の子を預けに來
涼み壺今日の野球へ花が咲き
豊年坊 同

涼み壺黄色い聲がよく笑ひ
涼み壺下から舞妓に冷かさ
天痴人 同

涼み壺露のせまさを見たとゝ
涼み壺露のせまさを稽古なり
同 同

涼み壺いつしか拳の稽古なり
涼み壺いつしか寝てる涼み壺
同 同

聴られたらしいが下りる涼み壺
同 同

涼み臺屋根を傳ふてやつて来る
涼み臺藝者ヲロリと見て通り
涼み臺派手な浴衣が碁を圍み
かくれんば涼み臺をば無しにする
涼み臺今日の疲れたを横になり
涼み臺思いのく唄になり

第九回 糸屋町句會

七月九日夜 川合舟々報
燈籠(兼題) 松郎氏選

明かくなる火の燈籠に風を知り
燈籠の器でこぼろぎ夜が明ける
燈籠の位置までほめる泊客
燈籠の火子供暫らく嬉しがり
なめくじのあさが燈籠に光つてあ
燈籠の蔭で一人は見付けられ
何時賣れる燈籠 石屋ならへこき
燈籠のあたりから宮暮れて行き
世話方の名は燈籠へよく目立ち
街道へ常夜燈一つ出ばるなり
燈籠へ尻を向けてる乞食にて
燈籠の影が緋鯉に碎かれる
灯すのでない燈籠は昔をつけ
(佳)燈籠の影から可愛い顔が出る
燈籠をほめておやつをよばれてあ
燈籠へすつかり夜となつて雨
さじまりもせず燈籠を流しに出
子が死んでから燈籠は消ひたきり
走馬燈店屋にあるこよく廻り
燈籠が靜かに廻り兒の寢息

兼題「剃刀」 飯山氏選

剃刀をあぶながつてる障子はり
剃刀を氣にして足を蚊にかまれ
剃刀を用意して行く避暑旅行
剃刀を器用に使ふ嫁き遅れ
剃刀を使ふ亭主に當があり
自分の子剃刀傷の敷を讀み
髷面へ床屋半で傷さ直し
砥石まゝ添へて剃刀貸してくれ
剃刀を仕舞うておいて向き直り
剃刀を持つとお客は眼をつむり
剃刀へやつこ乳房できげん取り
逢ひに行くのに剃刀の切れぬこ
剃刀を手の掌でする散髪屋
剃刀の切れ味見せるぬれた紙
剃刀を返へして妻の立話し
剃刀屋紙をザク切つて見せ
ハタ／＼がすむさきから剃り初め
組見に母剃刀を一寸當て
切れますか知らる剃刀叔父へ出し
むつさして剃刀持てば曇つて來
剃刀が従いて廻つた五十年

臆病の背すじに露の 一掬
臆病の引ばれつゝ茶をよばれ
臆病が鐵道自殺やつてのけ
紺緋中に臆病一人居る
臆病なおれに留守番言ひつかり
うらないへ臆病に手をそつこのべ
臆病さ云はす提灯借りにより
やう／＼と歸り臆病腹がへり

兼題「毛虫」 互選

(軸)白扇に父八十の歌を詠み
おざり子の手に銀扇のあざやかさ
白扇を涼しくみせる富士の山

桃 哉
同 同
松 並
山 海

道 加
挨拶が済んで扇の動くこま
いれむりなしながら扇つかつてる

「村」
村長も混つて村を送り出し
戀しさは村に届ける手紙なり

同 同
一 閑
同 閑
同 閑

村中が噂無視した戀であり
村中が浮き立つてゐる夏芝居

同 同
同 閑
同 閑

村らしい氣分を牛の聲に聞く
歸省した息子に村は淋しすぎ

同 同
同 閑
同 閑

砂ぼこり浴びて自轉車村に入り
赤屋根がほこりに見える文化村

同 同
同 閑
同 閑

別れ行く村に涙の灯がさもり
へな／＼になつて輕便村に着き

同 同
同 閑
同 閑

村はずれまで来て娘涙ぐみ
町に嫁し村へ歸つて別な顔

同 同
同 閑
同 閑

あざけな村の娘に戀が
接續の村にガフエー騒がしい

同 同
同 閑
同 閑

番茶會小集 (松江)

六月十八日夜 久方清宵報

「浴衣」 「蚊」 互選

浴衣着ておれば涼しい物に見ゆ
浴衣着てチト寒むすぎる風があり

同 同
同 閑
同 閑

講演今蚊に食はされたクチが出る

浴衣着へ夏の夜らしい風が吹き
ブンミ鳴く蚊へ寝そべり空手打ち
隣では浴衣を着てる涼み臺
一匹の蚊を殺すにも汗が出る
口答へする子でこへ蚊がうなり
湯上りの浴衣で派手に塗つて出る

「美人」
あの子美人でないかさ追つ掛る
美しくしき人へ戀心胸に秘め
ウエトレス美人であつてもてるなり
行過ぎた美人へする眼をす
切り暮へ美人は白い足を見せ

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

「患者」 互選
待つてる間患者同志が醫者になり
ヒステリー食鹽注射でも眠り
院長の無口に患者眼を開き
先生に患者さき／＼笑はされ

萬よし川柳 (三十六回)
「安心」 麻生霞乃女選

二三逼糺して母は氣を許し
病人へ安心させる虚言を言ひ
安心の彼岸へついた堅門徒
安心がならず暗着へお襪履なり
安心の錠は空葉にしてやられ
乳房握つて安らかな子の寢息
結納もすませ刺繡に餘念なく
枕蚊帳のぞいて母は縫ひつゞけ
不安心乍ら通はす幼稚園
安心をしたのか母の膝で寝る
母親は安心をして老けて行き
安心の出来ぬ容體續くなり
子を抱いて夫の歸途を疑はず
安心をさせよ娘責められる
夜遊びに出ぬ夜を母の背寝なり
飼はれを知らず鳴き出すきりぎりす
妊娠さ知れて一家の晴れやかさ
安心なさせたる氣の母嘘に馴れ
僞れば母は安堵の胸を撫で
(人)院長の言葉に母はホッとする
(地)丸菊が母の自慢の一つなり

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

同 同
同 閑
同 閑

(地) 大船に乗つた氣で二階の二人
(天) 朝戻り父は叱るさ思ひきや
翠峯

次回題 凡人五旬 八月十日グ切
摺元紋

朝鮮 毎日 二千號記念川柳會

朝、海 右大臣 選

病後らしい顔朝露を踏みに来る
朝刊へ紅茶が 薫る藤の 椅子
驛夫ごち掃き寄り合ふて朝の驛
もう話絶へて 玄海灘の音
ラプシューナイを浮てむつまじい
朝飯がすんでがらんま 広い家
信號旗海を隔て、二人立ち
海と空交協の色のい、天氣
ウエターの朝の氣持の午前九時

五客

臺水 牛頭子 妙雲 豊榮 昇川 銀鈴 娘知苦 柳葉子 夢路 光路 一坊路 仙鳴坊 浦文 三文 一 根路 佩刀子 右大臣 同 同 同

松耶 馬行 退社送別會

七月十九日夕、道頓堀かき彌にて
暑い濁つた頓堀の水も、船べりから見ると
燈の影、ホートの往き來、シャツ一枚冷
たサイダーでくつろひだ句會であつた。當日
桃谷順天館主夫人逝去に付、主幹路耶氏は出
席されなかつた。選句披讀後、馬行君は「前例
なき退社送別句會を謝し、主幹の意氣と熱を
を目標として柳道に精進せん」、こゝを誓ひ、
松耶君は「退社後も川柳雜誌のために應援を
するから、同人諸君の奮闘を望まれ、飯山君
は「一日も早く兩君復活の日を見なす」と迷
べ萬よしは「兩君によつて同人とさなつた私が
兩君のために送別句會をす一人となつた
人生」を語り、柳談盡きすビール盡きて散會し
たのは十二時前。來會者は松耶、馬行の兩君
と同人助六、かほる、三笑、飯山、ひろし、の諸
君と私(萬よし記)

自轉車にひかれ、子を叱り
子澤山 近所で半ば育てられ
子を出して朝の喧嘩を始め
(軸)父の肩を頼母しがられて居
松耶

噴水 馬行 選
噴水へ向ひ勸定待つてゐる
噴水の下に一本足の鷺
噴水のもう一足が寄り付けず
噴水を入れて浴衣のよく寫り
噴水で外交的な辭を弄し
噴水を下で鷺首をふり
噴水へ立つパラソルへ二人入り
噴水へ立つた少女の背が高し
出しやばつた葉が噴水に濡れて、
噴水へ一せいに寄る一年生
噴水が紅葉にさどく庭開き
噴水へ足を向けるさ飛ぶ蛙
噴水へお供の方も草履ばき
噴水へしみ、さした小間使
噴水を抱いて來たのに泣きやまず
噴水さ夫の影を見較べて
噴水に兄の家出がしのげれて
同 同 同 同 同 同 同

子 供 松耶 選
阪妻の好きなき子供へこけてやり
珍容へ子供間もなく抱かれて居
三人目見兼ね車掌は抱いて降り
母ちゃん、話を裂いて叱られる
氷餒頭一人、買へばみんな買ひ
子澤山で長屋でいつち古い顔
子のない夫婦、路のうるささ
浮く金魚、子は裏返し、
親心色げついたをよるこんで
(佳)仕事から歸り子供を探す母
男の子 鳥打帽が似合ふなり
かほる

古句質疑 この欄を新に設けま
したから、疑問の古句について質問を
して下さい。一度答へた句に就ては再
び答へず。なるべく古句の出所を書き
添へて下さい。係は姪子省二先生にお願
ひして快諾を得ました。質疑は本社宛



編輯室 から

路 郎 生

▼本號からいよいよ従來の同人制度を廢して別項の如き新組織とすると同時に、紙質を變へて一大飛躍的増刷をなし、市内の各書店に配本を斷行した。これは永い間の懸案であつただけに、萬遺漏なく續けて行けるものと思つてゐる。従來の同人組織を捨てたのは段々膨脹してゆく社の事業の運行上に支障が多いからで新制度は全く合名會社が株式會社になつた形である。又社に對する全責任を自分が背負つて立つ點から見れば、個人商店の形である。此變態的新組織がどこまで續くかは疑問であるが、目下の處は尤もいゝ信じて六月中旬に奮同人會議で合議の上決議したものである。奮同人は特別社友となり賛助員及客員は本社を推薦によつて、お願ひしたものである。▼本誌は創刊當時から見れば頁數に於て二倍以上に達し内容に於て尤も三倍となり、實に於ても一層よりよきものとなつたことを疑はない。しかも定價は創刊當

時の一部三拾錢を襲踏してゐるので目下のころ本社を經濟的負擔は容易ならぬものである。この一大發展を期して社會的によりよく認められるとすれば、經濟的的一大負擔も敢て苦とするに足らない。丈の覺悟をもつてゐるのであるから、特に愛讀者各位の義侠的應援をお願ひする次第である。▼新組織發表と共に、新に入社した人々退社した人々を左に掲げる。尤も退社した人々が必ずしも新組織に不平をいだいて出た譯ではなく、他の止むを得ざる理由によつて退社されたのであるから誤解のないやうに、特に一言しておく。入社した人々は河南放馬君、北山悟郎君、安西杏三君、比賀壽三君の四君で奮同人藤本卯之助君は賛助員に、同伊藤彦造君は客員にお願ひした。退社した人々では佐々木默閣君、塚崎松郎君、石賀馬行君、黒木英豆君、井上刀三君の五君である。松郎、馬行の兩君は従來本社の編輯部にあつて、本誌のため大いに盡されたので、その勞を多き退社送別會を開催（句報参照）したが、生憎小生の勤務先に不幸があつたため、萬よし君に代つて司會をこつて貰つた。幸ひに兩君ともその意を諒さして呉れたことをよろこんでゐる。▼久しく孤獨を續けてゐた高知支部の中

澤濁水君は七月廿二日に華燭の典をあげられたさうである。▼小松支部では七月九日に片山津温泉吟行を試み（本誌の客員安川久流美氏出席でなかくの盛會であつたさうだ）同支部では柳誦「猫柳」を發刊し既に三號に及んでゐる。發展を祈る。▼新に開設した蟹ヶ池支部で七月十七日午後一時から作句と講演の會を開いた。萬よし君と小生と出席した。（句報次號）▼八月七日午後一時から月尾島で仁川川柳社主催の下に、納涼川柳大會が開催される。▼七月十六日朝、安川久流美氏來社一泊された。▼村田鯛坊氏は周魚と改號された。▼石川縣鶴來町が一銀紙川柳社から銀紙創刊號が出た。▼川合舟々君の尊父が十七日に六十四歳で永眠されました。▼柴舟齋伯等の旅行先からの通信の一葉、犬山俗語と踊」を發表することにしました。

▲轉居と正誤

▼和田萩齋君は大坂北區相生町九二福田豊方へ移る。▼山川白蝶君は府下池田町西ノ口八七へ轉居。▼田中三平君は西區新町北通一丁目へ喫茶店「ヨット」を開店。▼前號募集旬「道具」の誤りに付き訂正。▼六月例會旬中水府氏の句は「髭おいた譯は自然に生へて來た」を訂正。

組後織變の川柳雜誌社

(ころは版)

特別社友

賛助員 池澤樂居 客員

岡本弘雄 伊藤彦造

片岡直方 岡田三面子

嘉納純 川村花菱

田中香涯 吉岡鳥平

長崎柳秀 武笠山清

野草省三 安川久流美

國枝史郎 小出楯重

藤本卯之助 木村半文錢

小酒井不木 柴谷柴舟

赤井清司 蛭子省二

末弘嚴太郎 森東魚

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

岩崎柳路 矢田右大臣
原史風 柳川洲馬
西垣松雨 安井ひろし
西本三笑 松木助六
本柳一路 安西杏三
德田双柳 酒井駒人
太田朝陽 北山悟郎
河南放馬 比賀萬よし
龜井花童子 比賀壽み三
横田眠聲 檜山千代二
高橋かほる 橋本二柳子
高見柳骨 特別社友
竹内多聞 同
津田耕水 同
中澤濁水 同
奈良井仙坊 同
桑島文絲 主幹
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

大阪市南區新戎橋南詰

道頓堀支部 幹事 庄 萬よし

天満支部 幹事 原 史 風

大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七

濱寺支部 幹事 太田 朝陽

淀川支部 幹事 西垣 松雨

神戶支部 幹事 庄 萬よし

山口縣山口町石原小路

山口支部 幹事 柳 川洲馬

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

東京市芝愛宕町一ノ二大成社内

東京支部 幹事 岩崎 柳路

函館支部 幹事 龜井花童子

大阪府住吉區安立町五丁目

住吉支部 幹事 德田 双柳

朝鮮仁川仲町一丁目八

仁川支部 幹事 矢田右大臣

松江支部 幹事 奈良井仙坊

岡山縣玉島町

岡山支部 幹事 津田耕水

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

石川縣輪島町鳳至上町

石川支部 幹事 桑島文絲

石川縣小松町猫橋詰

高知支部 幹事 本田柳一路

高知市木興力町

高知支部 幹事 中澤濁水

大阪市西淀川區姫島町五二一

大阪支部 幹事 横田眠聲

大阪府外阪急沿線刀根山療養所内

磐ヶ池支部 幹事 安西杏三

金澤支部 幹事 比賀壽み三

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記する。(各題二十句以内)

▼書籍はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記する。(各題二十句以内)

▼締切は厳守されたし。
▼各地會報は清記の(各題二十句以内)

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信封入の(各題二十句以内)

募集

第四卷第十號課題

八月十日締切
(各題二十句以内)

▼外科 前田 雀 郎選
▼タイピスト 大島 濤 明選

▼道具 三條 東洋鬼 共選
岩崎 柳路 共選

第四卷第十一號課題

九月十日締切
(各題二十句以内)

▼和 尚 蛭 子 省 二選
▼末の子 喜田 飯 山選

▼夫婦 佐々木三福 共選
青砥 不二綱 共選

每號募集

▼近作柳樽(卅句以内) 麻生路郎選
▼古句質疑 蛭子省一撥當
▼各地柳壇(會報) 蛭子省一撥當
▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に関する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所に願ひます

價定

一部 参拾錢(郵)
六部 壹圓六拾錢(郵)
十二部 参圓(共)

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は攝替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に関する御用件は個人宛にしない事

昭和二年七月廿五日印刷
昭和二年八月一日發行

第四卷第八號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
發行所 大阪市西成區千木通五丁目七番地
川柳雜誌社

大阪市港區八條通二丁目十二番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

店書捌賣
(大阪)明文堂 公立社 柳屋和正堂 三笠屋 其他市内各書店
(東京)仲見世 玉森堂 (神戸) 米田 後藤 (金澤) 石井
(函館) 石塚 (廣島) 金星堂 (石川縣) 小松 マコト屋

新聞雜誌印刷並ニ圖書出版業

其他美術
印刷百般

藤本兄弟社

大阪市東區農人橋二丁目
電話東一七〇番 七七〇番

暑さ御伺

— 謹而貴家の御清祥を祈上ます —

私共夫妻四月二日家を出て八十二日間の
川柳行脚を了へ此頃は讀書生活を致して
ゐます紙上乍略儀御厚情を深謝仕ります

竹馬居

朝鮮光州不動町十二

蛭子えび子す省せい二
蛭子えびます女に

參拜紀念の杓子及繪馬多少欲しく存じます
お心付きの節はよろしく願上ます

同 御 中 暑

町 屋 米

人 同

江 八 佐 朝 葵 中 加 島 和 辻 川 豐 森

口 木 々 田 原 井 藤 田 田 合 田 本

笑 毒 白 新 京 染 翠 翠 源 六 舟 流 赤
東區 東區 北區 市外 京都 東區 東區 東區 東區 西成區
殺屋町二 殺屋町二 善源寺町九 外守口車庫裏 都市七條大宮東入 大手通(一(内外イキ) 瀧花區西園寺町一〇三二 區南農人町一山田印刷所 區南農人町一山田印刷所 區南農人町一山田印刷所 區島町二(谷中方) 區內郡布施町永和和三七

暑中御伺ひ申ます

客員 安川久流美

八田 盜鐘 宮崎大公坊

○馬場加賀頭 ○寺西 憂喜

井波倭兵衛 小野寺松雪堂

魚川川柳子 野村 松水

内田北山人 三波富久雄

上野金鐵子 高田茶撫朗

長崎 姫菊 ○松島 小波

谷口 水聲 松島みどり葉

南智 久柳 誠屋權平路

明石 城四

(次第不順
印は改號)

石川縣小松町字龍助町

猫柳發行所

芦城川柳社

暑中御伺 吉川啞人

大阪市港區八條通二丁目北小路

暑中御伺 森田輝翠

大阪市天王寺區生玉前町八〇

暑中御伺 關本雅幽

大阪市港區鶴町三丁目一〇

暑中御伺 湯淺仙秋

色紙短冊 書繪歌俳用品商
大阪市東區安土町二丁目(小野和正堂)

川柳松川吟社

暑中御伺同人 藤沼梅笑

山形縣米澤市新町三八五一番地

初心者に付諸賢の御指導を仰ぐ

暑中御伺 齋藤照葉

栃木縣芳賀郡南高根澤村

暑中御伺 長崎柳秀

阪神沿線御覽 棧本

暑中御伺 中澤濁水

高知市本與力町

暑中御伺

柳誥(矢車)二號、(雪)一卷三號、二卷二號、
四卷一號相當代價にてお譲り下さいませんか。

石賀馬行

大阪市外豊中町榮通二丁目

暑中御伺

小田憲丸

福岡縣宗像郡池野村

暑中御伺

兼重白鷗

山口縣都港郡富岡村上野

暑中御伺

石井突支坊

尼ヶ崎市外杭瀬

暑中御伺

畑田炭車

大阪市浪速區惠美須町二丁目一五〇

暑中御伺

末廣麻畔

金澤市新道町三番地末廣川柳社

暑中御伺

西本三笑

大阪市天王寺區東平野町二丁目
(山田重方)電話長兩二八三五番

暑中御伺 安藤花蝶

安東縣驛前通社宅第一ノ二

憶れて來れば都の方が暑し

暑中御伺 松本助六

大阪市住吉區平野梅ヶ枝町五

月刊柳誌

めだま

神戸から出る代表的柳誌。
柳友諸兄の御一讀をすむ。
(誌代一部金十錢。一ヶ年分金壹圓。誌代は爲替が振替に限る。)

替に限る。

神戸市御崎本町三丁目二九一

めだま川柳會

振替口座大阪二五八一一番

暑中御伺 國枝夢人

横濱市久方町二ノ一二
中村商店内

人間に媚びてるやうな扇風器

暑中御伺 大島 儔明

大連市西公園町一四五

川柳雜誌社輪島支部

暑中御伺 本堅地川柳社

桑島文緑
石川縣輪島町鳳至上町九

「三十石發行所」 川柳めばね吟社

大阪市西區南堀江通六丁目二十番地

暑中 御伺 同人
加藤 骨頓 中西 卜柳
多田 白鳥 長野 夢中
成田 思水 山本 秋晴

暑中お伺ひ申上げます

蛇籠社同人

電話南六三九九番

大阪市東成區猪飼野町二二〇一

牧田憲翠

大阪市南區必齋橋筋二丁目(鷺尾方)

宮本逸蟻

大阪市南區田島町一六

高田九柳

大阪市南區戎橋北詰

石村喜音坊

大阪市南區田島町一六

宮田柳々

大阪市南區南綿屋町三二

北野白帆

暑中御伺 西垣松雨

大阪市東淀川區南濱町一九四

暑中御伺 喜田飯山

暑中御見舞

大阪市北區北森町三三一

北山悟郎

大阪市北區北森町三三一

北山十字路

大阪市北區北同心町一ノ一八

井上凡平

大阪市北區天神橋筋三丁目二五

中西久郎

大阪市北區旅籠町三三(藤繩方)

東谷聞路

大阪市北區與力町一丁目一八

田中彩秋

川柳雜誌社事務所

暑中御伺 橋本一二柳子

大阪港區八條通二丁目
掘替穴阪七五〇五〇

電氣旬報柳壇(月二回發行)

川柳を募る。雜吟。用紙ハガキ。小生宛

暑中御伺 安井ひろし

同 欣女

大阪市南區安堂寺橋通り一丁目四三

暑中御伺 堀楓林

和歌山縣田邊町今福町登
柳社

暑中御見舞

東京市芝區愛宕町一ノ一六大成社

川柳雜誌社東京支部

岩崎柳路

電話芝 一三〇三八〇番

神奈川縣中郡平塚町

旭日座通五〇五

酒井駒人

東京市麴町區有樂町三ノ三

日本榮養協會内

檜山千代二

暑中御伺

神戸市橋通二ノ八一

柏子木川柳社

(發行、投稿、會務一切)

神戸市西出町一五六

廣川番翁

大阪市此花區大野町二ノ九〇

河添一文

大阪府西區南堀江通六ノ二〇

山本秋晴

大阪府西區立賣堀北通二丁目村川方

柏子木川柳社支部 菱田金剛坊

◇新川柳の研究を目標として居る我が川柳社はその機關誌「柏子木」誌上に作句研究評、誌上互選句及眞劍なる研究記事を毎號滿載して居外、月刊「柏子木」第卅五號が出來ました、一部廿錢、會費六ヶ月壹圓拾錢、一ヶ年貳圓拾錢次の互選句「砂」三句八月十日ノ切

暑中見舞に換えて

○暑ければ暑い程自然は人間に接近して来る
 ○忙かしなければ忙かしい程工夫が湧いて来る
 ○貧乏すりや貧乏して世の中は面白いものだ
 ○私は酒を控へてゐますが病氣は知らない

昭和二年盛夏

道頓堀新戎橋

庄 萬

よ し

萬よし川柳題「凡人」五句 相元紋太氏選 八月十日〆切
 萬よし川柳は清書して選者へ送られる。三光へは粗景を呈しいつか纏めて出版する

◆ 探偵は 赤埴へ !!

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
 証 信 所 素 婚
 據 用 在 行 姻

偽證許害行爲隱匿財產特許侵害其他證據蒐集
 會社商店資産信用乳母會社商店員雇員調査
 家出人拐帶遁亡轉居先不明其他ノ所在搜查
 學生會社員雇人ノ素行夫ノ素行妻ノ行狀内偵
 家納血統祖先宗教父母ノ性格家庭性格素行學業
 體質交友趣味嗜好技術收入資産外必要事項調査

◆ 調査は 赤埴へ !!

(大阪東區北濱一ノ七(野村ルビ前濱側))

赤埴探偵社

電話本局二七三一 番



一町工大區北市阪大
所務社宮滿天 新行發

暑中御見舞申上候

炎威酷烈ながら甕底に座するが如き今日此頃諸氏の御左右は如何に候哉御起居御見舞申上候毎々本紙柳壇に對し一方ならぬ御配慮に預り千萬忝く奉存候今後共に層一層の御後援只管に願上候 敬具

大正 丁卯 孟夏

天満宮社報部

渡邊 柳浦
藤園

炎暑御機嫌御伺申上候

色紙短冊、畫帖、俳卷
古今名家俳歌短冊

小野 和正堂

大阪市東區安土町二丁目
電話本町一〇四六番
振替大阪九一七五番

本紙の新計畫

本紙は大正十三年七月一日に創刊して、今月で滿三ヶ年の日子を經て來ました。其間信仰方面の啓蒙運動に努力

致します一方では、年中行事の式典の意義を闡明するに勉めて來ました。來る九月號よりは更に一步を進めて、天満宮を中心とした幕末より明治の初年に

掛けての大阪の史實を掲載致し度いさ存じて居ります。諸兄の貴覽にかなへれば私達の幸福は是に過ぎませぬ。講談料は隨意御寄附下さればよろしいと又載かなかつてもよろしい讀んでくださればよいのです

清 酒

母親も白鶴ならこ一つ受け
 恩給も近く白鶴樽で据ゑ



灘 津 攝

嘉 納 合 名 會 社 釀

讀書子に告

今のやうにあさから新刊が出るに新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本に至極新しい本が出てゐる。こゝなればわざと新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にさつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわ

(路耶生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

古書目錄

が出来ました。御入用の方に送呈します。

「川柳雜誌」で見たと御書き添へ御請求を願ひます。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

暑中御伺 太田朝陽

南海沿線濱寺驛前

暑中御伺 高見柳骨

大阪市南區玉屋町四〇

暑中御伺 高橋かほる

大阪市南區北炭屋町二〇一

暑中御伺 中見光路

南海沿線粉濱町

暑中御伺 越村加香

大阪市東區備後町二丁目九(金子方)

額縁と書

暑中御伺 高須賀商店

大阪市此花區四貫島宮居町一〇

「古本屋」の廣告

一、「古本屋」主人は左記のものを蒐集して居ります。御持合せの方、又御友達にて同種のもの御蒐集の方があれば御通知を願ひます。

一、高價に御割愛下さればうれしいですが、書名、題名、著者、發行年號、内容等御通知下さるだけでも結構です。

「古本屋」の蒐集書目

一、古今内外を問はず圖書に關する事を記せるもの(書史、印刷史、書目等)

一、古今内外を問はず本屋の歴史及傳記を記せるもの。

一、古今内外を問はず本屋の店の挿畫又は本屋のホスター廣告(雜誌一枚摺、看板等)にても結構

以上の内容を有せないものにも本に關するものに御氣付の時は御通知願ひます。

發行所「古本屋」

荒木伊兵衛書店

大阪西區江戶堀一四六三番
電話土佐堀一四六三番

清涼飲料

リボントロン

アサヒビール





非常に愉快に聴ける

貝印内外

レコード

御家庭の喜びは

このレコードから!!

一枚は一枚づゝ

笑ひが漲ぎる

レコードの花形!!

合資會社 内外蓄音器商會



岡田三面子・今井卯木・西原柳雨・山中共古・安藤幻怪坊各補説
 武笠山椒釋
 (最新刊行)

誹風柳樽通釋 三編

全一冊四六判
 總布美本
 正價金參圓
 送料金拾錢

初編・二編 正價各 金參圓 送料各 金拾錢

柳樽に盛られた川柳全句の平押し的通釋は 既にその初編二編を出して好評噴々今茲にその第三編を見るに至つた。山椒氏の甚深な造詣と輕妙な筆致とは更めていふ迄もない。殊に本編は前記斯道の五大家の補説を得て、いよいよ完璧のものとなつた。眞に權威的述作である。

東京市神田區
 錦町一丁目

有朋堂

振替 口座
 東京七二四八

谷脇素文畫伯著

川柳字女さまじく 漫画

天下第一品、古今獨歩の名漫畫！

古來の名川柳蒐めも集めた此一巻！



探し出す度
伸び上る
猿ぐつわ



冤罪を
また着て
今日も事が済み



男なら
直ぐに
汲まうに
水かどみ

面白いとも、可笑しいとも、何とも云ひやうなし。一度巻を開けば誰でもアツハ、ハ、ハ。諷刺あり諧謔あり、ピンと頭心を刺す深刻な世間味は一讀現世の苦を忘れさせる。味讀すれば浮世人情の様々は眼前に髣髴として、知らず識らず處世のしるべともなる。こんな面白い本が又とあらうか。

**新刊
發賣**

川柳は我國獨特の藝術文學である。更に之を漫畫化して現漫畫境に一領域を開いたのは我素文畫伯である。其の飄逸輕妙な漫畫は到底他の追隨を許さぬ。亭主くらべ、嫁くらべ、娘質氣、親の恩、新世帯、當世女百態、放屁、鼻下長、後家、戀無情、浮世風月等數十種千五百有餘句を一巻に收む。

東京 講談社 發行
本郷 振替東京六六二九
△四六判・函入美裝
△三色木版刷十數頁
△漫畫千五百餘種
定價貳圓參拾錢
送料 拾錢